Feathers of four pieces

紫花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｆｅａｔｈｅｒｓ　ｏｆ　ｆｏｕｒ　ｐｉｅｃｅｓ

【Ｎコード】

Ｎ２４９０Ｈ

【作者名】

紫花

【あらすじ】

紅い少女は妹を助ける為に。青い少女は全てを望み通りにする為に。白い少年は愛する者を守る為に。黒い少年は未だ語らぬ目的の為に。飛翔する。あなたがもし飛べるのなら、何をしますか？鳥とその居場所のラブファンタジー。

序．捕われの少女達　～Ｔｈｒｅｅ　ｙｅａｒｓ　ａｇｏ～（前書き）

この話全般に、もしかしたら少し過激、不快に思う描写があるかもしれません。その際は御了承ください。

序．捕われの少女達　～Ｔｈｒｅｅ　ｙｅａｒｓ　ａｇｏ～

三年前。
某県星灯（ほしび）市、深夜の上空。
市の中心から突然光の柱が上がった。
その真下には神社。
『主南（にしな）神社』と言う、一風変わった名の神社からだった。
その日の空は曇天で、いかにも何か起きそうな雰囲気であった。
光の柱の側に、彼女はいた。
眩しそうに目を細めながら、一心に柱の頂点を見詰める。
寝間着の少女は呟く。

「紫穂…」

眼鏡をかけた少女は、人の名を柱に向かって呟く。
確かに、柱の頂には人がいたからだ。
柱の下方にいる少女よりかは幼い、十二、三才程の少女だった。
彼女の目は虚ろだった。
柔らかく両腕を開き、その体は空を向いている。
その時、姉らしき眼鏡をかけた少女の耳に、声が届いた。

【女、主南　初（うい）よ】

「誰！？私の妹をどうするつもり！？」

【御前の妹は、我の巫女となる。我の意思を御前達に伝える為に】

声は荘厳、それしか言いようが無かった。
女、男、どちらともつかぬ声。

いや、どちらの声でも当てはまる不思議な声だった。

【女よ、御前の妹を返して欲しくば、戦え】

「たたか、う…？」

【そう、戦うのだ。我が同胞達と】

少女―初は、理解がそろそろ追いつかなくなってきた。
自分の妹を取り返す為に、奪った奴と戦う、それは分かる。
しかし、その奪った奴の同胞とは何なのか。
訳の分からぬまま、話は進む。

【我が同胞は我のように快い待遇ではない。この社は永い間我を守り、また慈しんできた。しかし我が同胞は酷い扱いを受けている。時に汚水の中に捨てられ、時に埃の中に晒され…それは屈辱としか表せないものだ】

「…どういう事よ。あんたが紫穂を、妹を奪ったんじゃない。なのに何で倒すのがあんたじゃないのよ！」

【…同胞は其れにより歪み、本来此の世界を守らなくてはいけない責務を捨て、自らの為に動くようになったのだ。今迄は其れで良かった。しかし彼等の力も必要としなければいけない時、戦う時が来たのだ】

眉を寄せる初。
表情の変化は当然、声には分からない。
声は続けた。

【この戦いにおいて我と御前の妹は必要な存在だ。我と彼女が在らねばいけない。だから戦うのだ、女よ。同胞の怒りを鎮めるのだ。さすれば妹は御前の元へ帰る事が出来る】

声の言う事は分からない事だらけだった。
問い詰めても恐らく明かされはしない。それは先の返答で明らかだった。
それでも分かる事は一つ。
声の言う事に従う事。
相手が悪魔でも鬼でも、それで妹が助かるなら。
俯き、しばらく考えた初は頷いた。

「分かった。戦ってやるわ。あんたの言う仲間と」

【有難う…】

声が途絶えた。
すると、光は薄れ、ゆっくりと紫穂が落ちて来た。
抱き留める初は紫穂に叫ぶ。

「紫穂、紫穂…！」

妹は目を開けた。
そして、言った。

「…我が名は黄穂。紫穂ではない。主南　初よ、此れが御前の力だ」

黄穂と名乗る紫穂の目は、その名の通りに黄色い瞳をしていた。
口調までもが変わった初の妹は、握り締めていた右手を開く。
そこには玉があった。

炎を内に秘めたような、真っ赤な珠が。

序．捕われの少女達　～Ｔｈｒｅｅ　ｙｅａｒｓ　ａｇｏ～（後書き）

分からない事だらけだと思います。
それでも回を追う毎に謎は明かされていくと思います。
よろしければぜひ、お付き合いください。

閲覧、ありがとうございました。

一・夕陽の中の出会い　～Hellｏ，　Redbirｄ，　Ｍｙ　ｇｉｒｌ～

その事件から三年後。

「…来た。あいつの気配だ。行ってくるね、…黄穂」

「行って来い。そろそろ『碧（たま）』を鎮めて欲しいのだが」

「…分かってるわよ」

家である主南神社を出、初は外に出た。

「…ここからなら、近道した方が早いか。…飛ぶのは誰かに見られたらまずいし」

黒いセーラー服を翻し、少女は走った。
その胸元に、紅い珠を覗かせて。

○　●　○　●

その時、彼は歩いていた。
白いワイシャツ、灰と青が斜めに入ったネクタイ。
群青のズボンは夕日により黒く染められている。
鳶色の目と髪の少年は、いつもの日常に住んでいた。

「ふぁー、何だあの先公、人の髪にいちゃもんつけやがって」

欠伸をし、鞄を肩にかけながら、気だるそうに歩く。
風で彼の髪が少し靡いた。

左寄りのつむじ周辺の髪がそれによってふわふわと揺らいだ。所謂アホ毛、がそよ風に踊っていた。

（今の俺なんか見たら、ばあちゃん怒るだろうな。「こら、賢樹！」って）

思い、苦笑しながら少年、鳥居　賢樹は歩く。

（ま、ばあちゃんはもういないけど。どこにも）

真っ赤な太陽が辺りを朱に染めている。
綺麗な夕焼け空が、宵の闇に呑まれようとしていた。
（人間は死んだらいなくなる。天使とか、そんなのにはならない。
…けど）

現実を見る彼が夢を見たのは、

（人に羽が生えたら、俺はばあちゃんに会いに行こうとするんだろうか…）

その時だった。
ざあっ、と風が吹いた。
木々を揺らしたそれは、彼からは見えない筈の敷地を分けるフェンスを見せた。
そこに、金網の上を飛ぶ人がいた。
部活動のボールが飛んでいかないように、フェンスは高く作られている。
それを飛んでいるのだ。人が。
逆光の中、賢樹はその人を認める。
黒いセーラー服は間違いなく彼の学校の人間ではなかった。

白いハイソックスがこちら側に入り、もっとこちら側に入ろうと革靴が網の最上部のフレームを蹴った。
宙に浮かぶ女は、その下方で結ばれた髪のせいで翼を生やした人に見えた。
賢樹は目を奪われた。
女の顔が光る。眼鏡のせいだろうか。
それは女と賢樹の目が合った事を意味し、
女は落ちた。

「！！」

賢樹は走り寄り、女の前に立つ。女は涼しい顔をしてそこにいた。
だがその目は賢樹を睨んでいた。

「大丈夫か？てか、あんな高い所にどうやって登ったんだよ？」

「……」

女は押し黙っている。
賢樹はそれが気に食わず、思わず怒鳴る。

「無視かよ。何だよお前、他校生なのに人の学校に勝手に入って。
なんとか言えよ」

「…ここに来たのは、私だけじゃない」

「え？」

小さく口を開いた少女は、強い光を宿した目を向けた。

「あなたが余計な事をしたせいよ。…撒いたのに、追いつかれたじゃない」

『飛羽(ひば)乱撃！！』

眼鏡の女ではない、甲高い声。
共に降ったのは、真っ青な鳥の羽根。

「！！」

賢樹と女の間に刺さったのを見て、女は眉を寄せた。
突然の事態に声も出ない賢樹に、女は言う。

「あなた、目を瞑りなさい」

「は？」

「良いから、早く！」

目を半分瞑った途端、女が彼に突進した。
そして、ひょいと足を払われバランスを崩される。
その勢いで女は肩に賢樹を抱き抱えた。

「えっ！？」

「黙りなさい、舌噛むわよ」

女の命令を忘れた賢樹は、彼女の肩からその顔を見る。
少しふて腐れたような顔を目を閉じる事で消し、異様な程に真剣な顔つきになる。

瞬間、彼女を真っ赤な光が包んだ。

「…！？」

光は彼女の体にまとわりつき、余ったものは背中に向かった。
顔にさえ渡ったそれは、穢れを祓うように、飾り立てるように揺らめいた。
眩しく感じ目を閉じたその隙に、女は、主南　初は紅い装束を纏い夕空を飛んでいた。

「……！！」

賢樹は初の変わりようとあまりの空の高さに声も出なかった。
袴は勿論、小袖も紅い巫女服の初は、やはり真っ赤な翼をはためかせる。
黄土色の髪は紅く細い縄紐で一つに結ばれ、軽く風に踊る。
眼鏡の無い朱の瞳を真っ直ぐ前に向けながら、初は賢樹に声を飛ばした。

「降りるわよ。歯食いしばってなさい！」

「え、…って、うおっ！」

初は急降下を始める。
言われた通り賢樹は歯を食いしばり、目を固く閉じる。
彼女が飛んだ先は都会の数少ない木の中。
林より少なく、木の群れと言うには多いそこは森林公園。
木洩れ日の落ちる芝生の上に、紅い鳥はその細い足を着けた。
背負った賢樹を降ろし、脱力する。
同時に、初の紅い巫女服は深紅の羽根となり、風に吹かれていった。

「…お前」

「…何。早く失せなさい」

「やだな。お前、足怪我してるみたいだし」

眉間に皺を作った初は芝生に腰を降ろし、白い足を外気に晒す。
賢樹は彼女の前にしゃがみ、赤くなっていた初の足首を軽く触る。

「…っ」

少し眉間の皺を深くした彼女を見て、賢樹はその手を放し、鞄を漁った。
取り出されたのは湿布。
慣れた手付きで手当てをしていった。

「…よし。大丈夫か？」

「…ありがとう」

「どう致しまして」

靴下とローファーを履き直し立ち上がった初は、
突然賢樹を突き飛ばした。

「な、何だよ！？」

「しっ…、上にいる」

初に押し倒された形の彼は、彼女の髪の匂い等にどぎまぎしながら空を見る。
藍色の中に、彼は人影の黒を見た。

「…一回ぐらいかな」

「え？」

初はまたあの紅い装束を纏った。
今度は飛ばず、口の中で呟く。

『我、珠の力を使役する者也。汝は哥（うた）。我が力を我の目に映す物也。我が願いを形にせよ、其は我の望む物。其は焔。我が身に色付く紅く猛る光！』

初の周囲に紅い焔のような光が立ち昇った。
揺らめくそれは横に伸ばされた彼女の右手に集まっていく。

『其が我の焔ならば、滅せ、我に仇なす者を！』

集約されたそれは火球。
膝立ちになった初はそれを人影に向けて投げた。

『炎球・狂咲（くるいざき）！！』

飛んでいった火球は一直線に向かい、人影に当たった。
当たり、爆発したそれは花火のように夜空を照らした。

「…今回は良いか。力無かったし」

「…あの、そろそろ離れてくれないか？」
初は賢樹の声で我に帰り、少し頬を赤くしながら膝を浮かした。
「いなくなったか？」
「ええ。後は、あなた」
「俺？」
頷いた初は説明をした。
「あなたは今さっきまで見てはいけないものを見た。だから忘れてもらう。…あなたが『止まり木』なら別なんだけどね」
「『止まり木』…？」
「…とにかく」
言って、少女はまた呟き始めた。
『哥よ、我の願い、聞きたまえ。我が求むるは人の記しの末路。泡沫と消えるもの。其の名は忘却。我が瞳に宿りし者へ、汝の名を轟かせん』
初は呟く間、自らの翼から羽根を一枚抜いていた。
その言葉が終わった時、羽根がぼんやりと光る。
それを賢樹の額に貼りつけ、初は最後に一言言った。
『遺忘（いぼう）・散羽（ちりばね）』

羽根は額に溶けるように消えた。
それと同時、賢樹の目が閉じられる。
前にくずおれるように倒れた彼を、初は抱き抱えた。

「ここはさっきの学校より遠いから…そこまで戻さなきゃ」

そして少女は地を蹴り、闇に支配され始めた空に飛び立った。
その時、彼女は見た。
彼の額から、先程の羽根が零れ落ちるのを。
驚きを覚えながら初は飛んだ。
出始めた月だけが、彼女を見ていた。

○●○●

家に帰った初は、学校以外では常に巫女服を着るようになった妹へ今日の事を伝えた。

「黄穂、今日変な奴に会った」

「変な、と言うと？」

「私の『哥』が、聞かなかった。あの姿を見られたりしたから、忘れるようにしたのに」

ふむ、と黄穂は唸って俯いた。
数秒して、彼女は姉に言う。

「『瑤』か『玖』、何方かを持つ者なのかも知れぬ。少し、その者の素性を探ってみよう」

「分かった」

「其奴が同時に『止まり木』なら、素晴らしいがの…」

頷いた初は黄穂の元から去り、表へ出た。
夜空には多くの星々が煌めいている。
初はそれを見詰めながら、謎の少年を思い出す。

（…あいつ、一体何なの…？）

無意識に、初は胸元の珠を握り締めていた。

一．夕陽の中の出会い　～Hello，Redbird，My girl～

閲覧、ありがとうございました。

二．止まり木　～Ｍｙ　Ｐｌａｃｅ～

線香を上げ、鈴（りん）を鳴らし、拝む。
いつの頃からか朝の日課になったそれを、賢樹は今日もした。
願うのは今日の息災、他界した祖母の冥福。
思うのは昨日の事。

（あの時…俺は何をされたんだ？）

思い返した昨夕の非日常を分析する。

（確か…忘れさせるって言ったか？）

なら何故、昨日の事を覚えているのか。
考えに考えた彼の結論は、

（…うん。何かの撮影だ。一般人の俺は巻き込まれたんだ）

思い、目を開いて賢樹は遺影の中の祖母を見る。

「行ってくる、ばあちゃん。今日も護り石、借りてくな」

遺影の隣に置かれた小袋を持ち、ズボンのポケットに入れる。
そして彼は、家を出た。

「おはよう」

「おー、おはよう。…え？」

賢樹はぎごちなく、背後に顔を向ける。

「私の事、覚えてる筈。あなたが何者か分かるまで毎日側にいるから、よろしく」

「…マジかよ」

賢樹の日常に完全に非日常が入り込んだ、瞬間だった。

○　●　○　●

電車に乗っている間も、駅から学校に向かう間も、初は賢樹についてきた。

「…お前、学校大丈夫なのか？」

「三分あれば行けるから問題無い。それまであなたを見てるから」

「…ところでさ、何でそんな堅苦しい口調なの？あの赤い服の時は普通だったのに」

それを言った途端、
初の顔が赤く染まった。

（えっ！？何で真っ赤になってんだよ！？）

「…用事思い出した。それじゃ」

「えっ、あ…」

初はそう言うと全速力で賢樹の元を離れた。

「…何なんだよ…？」

その初は真っ赤な巫女服を着て、朝の空を駆けていた。

「何なのよ、何なのよあいつ…！」

その頬は相変わらず赤く。
その目は何故か、潤んでいた。

「…仕方ないんだから、私は、私は…！」

翼を強くはたき、スピードを上げる。
空に数枚、赤い羽根が舞った。

○　●　○　●

学校に着いた賢樹は、早速友からの挨拶を受ける。
少々苦痛を伴う形で。

「おはよーサッキー！」

「ぐえっ！…お前な、何で毎回人の首締めて来やがる」

「だってサッキー好きの事大好きなんだもん」

「…そんな理由で俺を殺すなよ？」

物騒な事を言った少女は坂口　真姫（まき）。

焦げ茶の軽く巻いたツインテールが特徴の小柄な少女。
中学の頃から彼の同級生なのだが、友達になったのはその終わり頃からで、その頃から彼女はこのように接してくる。
そんな彼女に辟易しながらも賢樹は彼女と友達を続けている。
そういった所が彼の表しにくい優しさなのだろう。

「よう、賢樹。相変わらず仲良いのな」

「あ、おはよ、隼(しゅん)。何よ、私達の邪魔する気？」

「助けろ隼、こいつに殺される」

二人の前に、明るい髪の少年が現れる。
佐久間　隼、左耳にピアス、頭には黒いヘアバンドをした見た目は不良っぽい賢樹の親友。
いや、幼馴染みというのが彼らの間柄を説明するに正しい。
嘆息と共に真姫を賢樹から引き剥がした隼は、彼女の代わりに賢樹に寄りかかった。

「何だよ隼。重いからどけよ」

「黙れ。今朝の子は何だ？浮気相手か？坂口という彼女がいながら」

「え…サッキー酷いなあ、私という者がいながら」

「浮気相手どころか坂口、お前は俺の彼女じゃねーだろ…」

絡んでくる友をなだめ、賢樹は教室へ向かい歩き出す。
学校は不可侵の日常の場所だった。
最近彼の身の回りで起きている非日常は、彼には受け入れ難いもの

だからだ。
騒がしい仲間達と笑い合い、日々を過ごす。
訳の分からない事態に、鳥居　賢樹は巻き込まれたくなかった。
だが、現実はそれを認めない。

○●○●

放課後、部活を終えた賢樹の前に、また初は姿を見せた。

「お前も飽きないな」

「あなたの得体が知れたら、すぐにでもやめる」

暖かな夕日を浴びながら二人は歩く。
時は五月、そろそろ暑くなる季節。
それなのに彼女はセーラー服をきっちりと着込んでいた。

「暑くないのか？」

「全然平気」

「そうか……」

続かない会話に困り果てる賢樹は、ふと彼女の足を見た。
真っ白いハイソックスの下半分が、更に白い事に気付く。

「…そういえば、その足大丈夫か？」

「…平気。…その」

俯いた彼女が何かを言いかける。
その時初の目が見開かれた。
ワイシャツの襟を引っ張り、賢樹の身を自分の方へ持っていく。
それは二回目の首絞め。

「お〝えっ」

「来た。しつこい奴」

初は羽根を散らして短く呟く。

『防護・金城』

呟き―『哥』の通りに、金に輝く光が初の身を守る。

「来たって…この前の奴か！？」

「ええ。あの女は目が良いから」

足元に落ちた青い羽根を一瞥し、初はそれの主を見る。

「央真（てるま）　みちる…『碧』を持つ、私の敵」

真っ青な少女は腕を組み、姿と同じ蒼い目で紅い鳥を睨む。

「こんにちは、紅い鳥さん。あんたの長所は勘の良さだったかしら？」

「時間帯的にそれはおかしい。それに私は人間。動物に挨拶なんかするなんてもうあんたの脳味噌腐ってるわね」

「…そうね。私達は『禽(とり)』だったわね。…ところで」

苛立ちを抑える為に閉じた目は、今度は賢樹に向かう。

「あなた、『禽』じゃなさそうね」

「……なら、何だよ」

「『止まり木』かしら？庇ってたし…何にせよあなた、邪魔よ。死んで」

言って蒼い鳥―みちるは『哥』を紡ぐ。

『氷羽(ひょうう)嵐斬！！』

マシンガンのように、青い翼から羽根が飛ぶ。

「あの時のはお前かっ！？」

「あら、あなたその時いたのねぇ。これはあの時のとは違うけど」

羽根が賢樹の頬を掠った。

傷の上に、氷が被さる。

「！？」

氷は傷口の上より更に広がっていく。

数秒とかからぬ間に、頬全体を氷は覆っていった。

「見くびんじゃないわよー？早くどうにかしないと彼、凍死するわよ？」

「卑怯者…！」

初は賢樹に駆け寄り、赤い羽根を持って、凍り付いた頬を『哥』と共に撫でる。

『氷融（ひょうゆう）・篝（かがり）火』

「…すまん」

「逃げなさい。時間は稼ぐわ」

言うとすぐ、初はみちるに飛んだ。
その手に拳を作り、突進する。

『拳舞・華（かよう）踊！』

「あはは、当たらないわよ！」

初から繰り出される拳を、全てみちるは避け、ぼそりと哥った。

『…凍縛凝鎖（とうばくぎょうさ）』

「なっ…！？」

「！？」

地を見た初は、賢樹の足に氷が固まっているのに気付く。

逃げていた途中らしく、先程とは違う地点に彼を認める。
「よそ見しないでよ、初ちゃん！！」
みちるは哥わず、肘を初の頭頂部に叩き込む。
衝撃を受けた初は、地上へと墜ちる。
「！！」
彼女は賢樹の元へ墜ちていった。
受け身も取れなかった初は、速度を緩めず真っ直ぐに。
「初！！」
「！？」
賢樹に名を呼ばれた彼女は、痛む頭を動かして彼を見る。
「来い！！体勢を立て直せ！！」
「…！」
返事の間も無く、鳥は彼の元に。
しかし。
衝撃は無かった。
「…あれ？」
「ねえ、あなたまさか」

目を開いた賢樹の目の前には、初の美貌。
その手は彼の肩に置かれているが、重さは感じない。
驚く二人の内、女は言葉の続きを言った。

「『止まり木』、なの…？」

他人から、仲間へ。
これが彼等の、始まりだった。

二．止まり木　～Ｍｙ　Ｐｌａｃｅ～（後書き）

閲覧、ありがとうございました。

三．巫女の御言葉～Ｉｓ　ｌｏｖｅ　ｐｏｗｅｒ？～

賢樹の心臓は、自身を誇示するように高鳴っていた。
それが何故かは分からなかった。
危ない事態を免れた為か、それとも。
あまりにも間近にある、初とその顔を突き合わせる形になっているからか。

「嘘でしょ？あいつ…『止まり木』な訳？」

みちるの顔は焦りが簡単に見てとれた。
だが、今がチャンスと彼女は哥い始める。
その間も、初と賢樹は会話を続けていた。

「なあ、『止まり木』って何だ？」

「昨日私が、短時間しかこの姿にならなかったの覚えてる？」

「ああ。そういえば何でだ？」

問いに、初は答える。

「私達『禽』の力は、使わない間に玉に蓄えられた分しか通常は使えない。けれど、それを補える人がいる。それが『止まり木』。…あなたの事よ」

「…俺が…」

だが、

「おいおい何だそれ、すごい設定だな」

「…え？」

「どこまで俺を巻き込むんだよ？そろそろネタばらししても平気なんじゃねえの？」

笑いながらそう言う賢樹に、初は怪訝な顔をする。

「これさ、何かの撮影なんだろ？すごいな、今の撮影技術は。簡単に飛んでるように見せるんだな」

「…何言って」

「みちるだっけ、お前も大変だなあ！いつまでもそこにいてさ！」

何かを叩いた、そんな音がした。
否、その音は叩かれた音。
初が賢樹の頬を打った。

「馬鹿でしょあなた！現実を見なさい！！」

「見てるだろ！！だからこれはドラマの撮影か何か「違う！！」

叫ぶ初の目は真剣だった。
日本人ならば有り得ない朱色の瞳は、確かに賢樹の顔を捉えていた。

「これが現実。あなたのいる世界。目を背けないで。私達は今確かにここにいて、戦ってるの。夢なんかじゃない、全身で感じなさい」

みちるの方を向いた初は、哥う。

『我は謳う、我が為に、汝が為に。籠の中で啼こう、喜びを、憂いを。それは我が思い。捉える汝はどう映す？』

それは賢樹に向けられた歌。
この二日で覚えた初のイメージを、彼は戸惑いながら言葉にした。

「……炎。眩しく輝く、炎」

笑みの形を作った口は、『哥』の続きを紡いだ。

『汝が思いは我が思い。それは炎と映された。ならば我は炎となろう、此の腕（て）に翼に、其を纏わん』

『哥』に応じ、初の翼と腕に紅い光が昇り立つ。

（…やっぱり。力が回復されてる。『止まり木』がいるって…）

「遅い！『氷鳥乱舞！！』」

しかし、初が攻める前に、みちるの『哥』が終わる。
巨大な氷の鳥が現れ、その翼を羽ばたかせる。
途端に辺りの空気が冷えるが初は気にしない。
自身に満ちる力に喜びを感じながら、彼女は哥った。

（…なんて、幸せ）

『光鳥・思形』

飛んだ。
真っ直ぐに氷の鳥へ向かった初は、体ごとぶつかっていき、
それを砕き割り、賢樹の元へ戻って来た。

「な…」

輝く氷の欠片が降る中、舞い戻った紅い鳥は、隣にいる『止まり木』
に話し掛ける。

「…あなたの力が、今の結果。見て、これが現実。…綺麗ね」

「……ああ」

見上げる夕焼け空に反射して、氷が煌めく。
間近で光る星達は、二人の勝利を祝うかのようだった。

○　●　○　●

「…それじゃ、行くわよ。あなたが『止まり木』って分かった以上、
会わせなくちゃ」

「誰に会うんだ？」

「ついてきて。私の家にいるから」

初の話に従い、賢樹は歩く。
向かった先は神社。
主南神社、初の家へ。
引き戸を開け、初は屋内の誰かへ告げる。

「ただいま。…連れて来たわ、『止まり木』を」

「上がれ、『止まり木』。挨拶出来ない木偶の坊では無かろう？」

初に続いて賢樹も板の間に上がった。
彼女について歩き、辿り着いた部屋は和室。
そこに座っていたのは少女。
初より色素が薄いクリーム色の髪に、何故か巫女服。
人形のようにどこか感情の無い黄色い目を細めて、初の妹、主南紫穂は口を開いた。

「よく来た『止まり木』。我は主南　黄穂。初の妹であり、『禽（とり）』の巫女だ」

「…はあ。えと、鳥居　賢樹です」

「ふむ、良い名だな。鳥居と言う名字など、御前の役割にぴったりではないか」

からからと笑う少女は、不意に表情を消した。

「さて、『止まり木』鳥居　賢樹よ。御前が初の相棒となったからには、色々と教える必要が有るな」

「はい。…何故、俺達は戦っているんですか？そこがよく分かりません」

「ふむ。ならば初達の持つ『玉』に関して教えなければの」

巫女は語る。
何時からか、『玉』はこの世に存在し始め、どれも強い力を持っていたと。
それを神や悪魔と考えた昔の人々は、『玉』を祀るようになった。
それがずっと続いた初の持つ『珠』は、しっかりと力を振るってくれている。
しかし、みちるの持つ『碧』は祀っていた社が崩れたか、それとも他の原因なのか、悪心を持つ者に力を渡すようになってしまった。
残る二つも行方が分からない。
唯一つ分かる事は、『碧』は怒り苦しんでいるという事。

「だから我は巫女として、御前達に伝えねばならんのだ。戦う理由と其の意味をな」

（戦う意味…）

賢樹は初の戦いを思い出す。
真っ赤な羽根を散らして戦う少女は、神の前で踊る巫女のようだった。

（…神みたいな力を持ったものを、鎮める為、か…）

ふと賢樹と目が合った黄穂は、彼が理由を分かったと見たのか笑う。

「他にも聞きたい事が有るなら聞くぞ？」

「じゃあ、『止まり木』って何ですか？」

大人びた笑みの黄穂にどきりとしながら、賢樹は自分に一番大事な事を聞いた。

黄穂はやはりといった顔をする。

「名の通り、御前達が知っている通りの役割だ。羽を休め、力を蓄え、また飛び立つ為の場所だ」

「何だ、何か特殊な役割でもあるのかと」

「特殊…役割ではないが、有るぞ」

その後の言葉に、二人は絶句する。

「『止まり木』はの、相棒との身体的、精神的な交わりにより力が強まる。つまり『禽』の力を強くする事が出来る。尤も、感情の籠らない其れは意味が無いがな」

二人の頬が真っ赤になった。

互いの顔を見合わせ、黄穂に言う。

「「誰がこんな奴と！！」」

「息も合っているようだし、此方が口出しは無用だな」

二人は二の句が告げなかった。

○　●　○　●

「もう六時か…」

「時間、取らせてごめんなさい」

「大丈夫。案外、家から近いみたいだから」

工場の煙で朱に見える月が、夜空を照らす。
賢樹の見送りで共にいる初は、それを見ながら小さく言った。

「…ごめんなさい、紫穂が、あんな事」

「紫穂？黄穂じゃないのか？」

「三年前にあの子は『禽』の巫女になってから、黄穂と名乗ってるの。別の人格があの子の中にあるみたいに」

言葉を切って、初は最初の話に戻る。

「あまり気にしないで。『止まり木』が居なくてもこうして今まで戦って来れた。紫穂の言う事なんかしなくても、あなたがいればきっとすぐ『玉』を鎮める事が出来るわ」

「仮に勝てなくてヤバくても、そんな事しないけどな」

初の先を歩いていた賢樹は彼女に振り向き、軽く笑って言った。

「あいつに『止まり木』はいない。すぐに勝って、他の『玉』もすぐに鎮められるさ」

「…そうね」

呟くように、初は相槌を打つ。
俯いた彼女はそれより小さな声で伝える。

「…あの、昨日、湿布貼ってくれて、ありがと」
「ん？良いって。まあ無茶はするなよな」
「…それから」
少し上げた初の顔は、酷く真っ赤で。
視線を合わさず、朝の答えを告げた。
「…私、人見知り激しいから。今はこんな言い方しか出来ないだけ。『禽』の時は少し…いつもと違くなるから…」
「……あ、うん」
頭を掻いて、賢樹は止めていた歩を進めた。
その後は気まずい空気が続く。
「…ここ、だから。ありがとな…主南」
「分かった。…じゃあね、鳥居君」
「…おう」
少女は巫女服を纏い飛び立った。
一枚、落ちた羽根を拾い上げ、賢樹はそれを街灯の光に透かす。
羽根は夜風に吹かれ、ふわふわと動くのだった。
○　●　○　●
「…まさか、『止まり木』が見つかっちゃうなんて」

どこかの家の風呂場。
二十五メートルプールの半分程の大きな湯船。
一人、蒼い鳥はそこに沈んでいた。

「あたしも探すしかないわね、『止まり木』。世界に二人といない、見つかる確率の低すぎる探し物…」

目を伏せ、また開く。
央真　みちるの茶色い瞳は、怒りをその中に孕んでいた。

「…絶対、集めてやるんだから。あたしの願いを叶える為に…」

やがて、少女は笑い出す。
始めは小さく、終いには大きく。
広い風呂場に、ずっと少女の声は反響していた。

三．巫女の御言葉～Ｉｓ　ｌｏｖｅ　ｐｏｗｅｒ？～（後書き）

閲覧、ありがとうございました。

四．彼女の一面　～A　only　for　two～

五月末の休日。

「…お待たせ」

「…雰囲気変わるな、私服」

「私服は自由だし。あなたはあまり変わらないけど」

「うるせー」

主南神社の階段下で待ち合わせた二人は歩き出した。
目的は賢樹の友、坂口　真姫の誕生日プレゼント選びである。

「何か悪いな、休日無駄にしちゃって」

「平気。勉強か『玉』の探索でいつも終わるから」

「『玉』なんて、落ちてたりするのか？」

首を振り、溜め息をつく。
見下すような目で初は言う。

「そんな事ある訳ない。骨董屋とかだって分からない訳？」

「あ…すまん」

腕組みして歩く彼女を見て、ふと賢樹は思った。

（こいつ、そういえば綺麗な顔だな）

軽く柔らかそうな黄土色の髪は、団子となり頭に乗っている。
赤いシュシュがそれを引き立て、常の彼女のイメージを覆す。
真っ赤なチュニックにショートパンツ、黒のレギンス、足は歩きやすくスニーカー。
活発かつ可愛らしい格好に思わず目を奪われた賢樹は、

「…何よ」

「なっ、何でもない！」

怪しまれる結果になったりする。

○　●　○　●

「ところで、その友達はどんな人なの？」

「ん？えーと…小動物みたいな奴だな」

「小動物？」

途中寄った喫茶店で、初は買う物を考えていなかった賢樹に問う。
彼は頷き、真姫について話す。

「小柄で、何かと俺に構ってきて、殺したいとか物騒な事言うけど根は優しい良い奴だな」

「…身体的な特徴を」

「分かりました」
賢樹は鞄からペンと紙を取り出した初に、真姫の特徴を伝えた。
話によると彼女は美術部で、賢樹の言った特徴を思いの通りに描いていく。
「…こんな感じ？」
「すげー！そうそうこんな感じ！…で、こいつに何贈れば良いかなって」
口元に手をやり、初は紙に描いた真姫を見る。
その目が真姫の髪に向かった時、ぼそりと呟く。
「…髪飾り」
「髪飾りかあ…うん、それにしよう。アドバイスよろしくな、主南」
「…分かった」
喫茶店を出て、二人は何軒かの店に入る。
二軒に絞られた頃には、既に夕方になっていた。
「黒いリボンか白い…えと」
「シュシュ。決めるのはあなただから、ゆっくり考えたら」
「だな…あれ？」

賢樹は人混みの中、ある一点を注視した。
彼の目に映る人は男。
ふらふらと二人の方へ向かって歩いていた。
「何だろあの人、不審者っぽいな」
「……」
男はその時、二人に気付いた。
すると、猛スピードで走って来た。
「!?」
「…みちるか」
冷静な判断を下した初は、姿を変えるとすぐに賢樹を抱えて飛んだ。
男は二人を追って駆ける。
その速さは人の出せる速さではなかった。
「なんだあの人!?」
「みちるが操っているとしか思えない。…降りるわよ」
初は近くの廃ビルに賢樹を降ろす。
遅れて同じ格好で、男とみちるがやって来た。
「今晩は、初に『止まり木』くん。デートでもしてたのかしら?」
「まさか。あなたじゃないの、デートしてたのは?」

「冗談言わないで。この人は只のあたしの『止まり木』。操ってるけどね」

やっぱり、と初は呟く。

賢樹の肩に手を置く彼女は小さく哥った。

『我、汝に歌を贈ろう。其は我等の故郷の歌。歌えば思い出す。在りし日の力を。…強化・昔貴(せきき)』

賢樹は自分の身に力が溢れ出すのを感じた。

『哥』の通りに強化された体に触れている初は飛ぶ前に言った。

「操られている向こうの『止まり木』はあなたに攻撃してくるかもしれない。気を付けて」

上空に飛び上がり、哥う。

だがみちるは笑う。

「あまり離れすぎたらダメよ！あたしが『止まり木』狙っちゃうから！…『利堅針氷！！』」

みちるの生み出した氷の群れが賢樹を狙う。

賢樹は数段上がった身体能力で避けるが、腕に足にと氷は掠った。

「下がって、鳥居君！」

「！」

『炎波・湯滝！』

初の『哥』の名の通り、炎の滝がみちる達に落ちる。

『星霜防壁！！』

みちるの防御の『哥』は果たして身を守れるか。
一言何かを呟いてから、みちるの安否を全く気にせず初は賢樹の眼前に降りてきた。

「平気、鳥居君？」

「……」

「…？……！！」

賢樹が見たのは初の格好。
頭は長い髪を耳の上に一つに結び、紅い花のように美しい髪飾りを着けている。
足は腿まである長い足袋にヒールのある下駄。
そして胴は朱の着物に横で蝶結びにされた深紅の帯。
しかし肩は大きくはだけ前は最低限をようやく隠す程の長さ。
それらを内側で隠すものは無かった。
そのような際どい格好に初めて気付いた初は当然頬を染め、

「いっ、やあああああぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

「大丈夫、ギリギリ見えてなぐあ〝ぁっ！？」

「お嫁行けないいぃ！！いやあああああ！！！！！」

鳩尾に一発蹴りを入れ、流れるように顔面を数十回は踏みつける。

ようやく初の気が済んだ時には、賢樹の顔は目を覆いたくなる程酷い状態になっていた。

「…鬼ね。あそこまでやると」

男の腕に座り、青ざめるみちるは彼を見る。
操られている筈の男は何故か、息を荒くしていた。

「…物好きね、あんた」

呆れたみちるは苦笑を深め意地悪い笑みになる。
ふわりと浮き上がり男から離れると、戦線から離脱しながら命令した。

「やっちゃいなさい、好きなように」

男は化け物じみた咆哮をあげた。
ドスドスと廃ビルの天井を踏み抜かんとするように走り、初に奇襲をかけた。
手を伸ばし、初の腕を掴もうとする。
しかし。
男は吹っ飛んだ。

「盲壁（もうへき）・気阻（きそ）。私が上で呟いてたの、あなたは分からないわよね」

うずくまり呻く男に歩み寄った初は笑いながら聞く。

「…見た？」

殺気が膨れ上がった。

重力が倍になったように、大気が重くのしかかり、男の動きを止める。
笑っていた初は、朱い目を怒りに燃やして睨みつけた。
男は操られているのだから、何も言えない立場にあった。
それなのに初は、話を進めた。
男の脳内で、危険だという知らせが鳴り響く。

「そう、見たのね。…悪いけど、死んでもらうわ」

男の断末魔が橙の空に響き渡る。
烏が呑気に鳴きながら飛んでいた。

○●○●

「四百五十円のお返しです、ありがとうございましたー」

「ふう、割としたな」

「買い物なんて、そんなもの」

店から出て来た賢樹の手には小さな袋。
中には白いレースに縁取られた黒いリボンが二本。
手に持ちながら彼は、外で待っていた初に言う。

「本当、ありがとな、助かった」

「…私は今日は、いつもの休日が良かった。…あんなの、人に知れたら生きていけない」

「大丈夫だって、見えてなかったし。次は無いだろ、そんな事」

初は恨めしげに紫穂がいけない、と呟く。
笑う賢樹は袋を初の頬に付けた。

「…？」

「受け取れ。今日の礼だ」

見ると彼のもう片方の手には同じ袋。
初の頬に当てられたのは、彼女宛てのものだった。

「…開けて良い？」

「ああ」

貼られたテープを丁寧に剥がし、中身を取り出す。
紅い石が中心に嵌め込まれた、銀の十字架のペンダントが出て来た。

「…これ」

「ん？お前あの店で見てたみたいだからな」

「…違う。私はその隣のカラフルな数珠見てた。中に十二支が見えるやつ。それに私は神社の娘。十字架はちょっと」

賢樹は気まずそうな顔になった。
それを見て、
初は、笑った。

「けど良い、ありがとう。大事にする」

「…お、おう」

（その笑顔はねえよ。…反則だろ）

その帰りの間、賢樹は初の顔を見る事はなかった。
否、見れなかった。
自身の顔の熱さを悟られないようにするので、賢樹は精一杯だった。

○　●　○　●

「今回のは色々とナシね。テンパリ過ぎよ、あの女」

『碧』を見ながら、みちるは自室で呟く。
只の蒼い石は、みちるには光を放っているように見えていた。
光は翼のように広がっていた。
みちるはそれを眺めながら一人ごちる。

「あまり力の回復は感じられなかったから、やっぱり全く関係ない人はダメね。何かしらあいつらに関係ある人にしてみようかしら」

そこで扉をノックする音が聞こえた。
若い女の声だった。
みちるは彼女が何者か、よく分かっていた。

「みちるお嬢様、浴室の準備が出来ました」

「ありがとう。すぐ行くわ」

侍従が去るのを感じながら、彼女は『碧』を見る。
空や海より美しい蒼を見詰めながら、みちるは呟く。

「怒りや憎しみ…そういった感情を持つ人なら、力を得やすいかしら…」

楽しみ、声にはせず、みちるはそう言うのだった。

四．彼女の一面　～Ａ　ｏｎｌｙ　ｆｏｒ　ｔｗｏ～（後書き）

この話の中で、私の別作品とリンクしている所があります。どこでしょう？

閲覧、ありがとうございました。

五．隠れた気持ち　～We　aren't　friend，but…～

監視は必要なくなった。
初はその事を考えながら目の前のキャンバスに色を塗る。
筆に付いている色は明るい灰色。
キャンバスに乗る色は総じて暗い色。
心境を表すそれを、認めないというように初は黒くバツを入れる。

「ちょっと主南さん！絵をまたダメにして！！」

それを咎める者が一人。
黒髪を短い一本の三つ編みにする少女。

「すいません、須藤先輩。良い絵が描けなかったもので、つい」

須藤　成実（なみ）。
それが少女の名前だった。

「ああ、またキャンバスが…、最近あなた変よ。部活には来ない日はあるし、描くかと思えばこんな風にするし…」

「…すいません」

大きな溜め息をつく成実に初は謝る。
それを聞き更に大きな溜め息をついた成実は告げた。

「あなた、もう今日は帰りなさい。片付けはこっちでするから」

「すいません。…お疲れ様でした」

画材を椅子に置き、鞄を持って美術室を出た。

「…はあ」

初はスランプに陥っていた。
描きたいものがこの一ヶ月描けていなかった。
夏服に変わって数日のこの日も、彼女は浮かない顔で廊下を歩く。

（…分からない。何で描けないんだろ）

自問するが、自答は出来ない。
今の初に解決の糸口は全く見えていなかった。
同時に、敵影すらも。

○●○●

初が学校を去って一時間半程、それはそっと入り込む。
学校の二階、三年生の教室。そこに一人、椅子に座る少女。
成実であった。

「何なのよあの子！他人の気も知らないで…」

頭を抱えて叫ぶ少女は、侵入者に気付かない。

「あの子、何も気付いてないんだわ。あの子は失敗作でも私には描けない上手さなの、知らないんだわ、腹立たしい…」

そして成実は、扉を開いてしまった。

「許せない、あんな人、いなくなってしまえば…」

「その願い、叶えましょうか？」

「！！」

真っ青な羽が、真っ先に目に入った。
あばらまでのチューブトップ、その上の、胸すぐ下までの青いベスト。
腿を包むスパッツの上には小さなスリットが二つ入ったやはり青のミニスカート。
いや、ミニではないかもしれない。後方は脛まであり、裾は細く裂けている。
着物の袖だけを残したような手首の青布は長く波打つ。
額に巻かれた幅広のリボンも青く、横で蝶結びにされ、リボンの中心を玉の連なる紐が通る。
涼しげな格好の蒼い鳥は窓枠に腰掛けていた。

「あなた、相当あの女の事嫌ってるみたいね」

「誰あなた…一体どこから！？」

「そんな事どうだって良いでしょ。あなた、あたしと手を組まない？あなたがいればあの女を打ち負かしてやれるかもしれないわ」

蒼い目を細め、にたりとみちるは笑う。
それは悪魔の微笑み。
成実は一瞬躊躇い、
頷いた。

○●○●

「よ、主南」

「…鳥居君、何で」

家へと続く神社の石段で、初は賢樹と遭遇した。
見慣れた制服姿の彼はそこに座っていた。
成実がみちると出逢う、約一時間前の事だった。

「ん？ああ、最近みちるだっけ？あいつ、最近来ないからそろそろ来るかなって思って。近くにいた方が良いかなと」

そう、とだけ初は返した。
素っ気ない態度が気になり、賢樹は聞く。

「どうしたよ？何かあったのか？」

「…何も。今日も来る事ないでしょ。連絡は携帯で出来るし」

メタリックピンクの携帯電話を見せ、階段を登る。
家に入る前、賢樹が声を飛ばした。

「なんかあったら言えよな！仲間だろ！」

「仲間？」

呟き、鼻で笑った初は睨み付けた。

「私はあなたの事、仲間だって思った事無いから」

引き戸が閉まる、強い音がした。
「何でピリピリしてんだよ、あいつ」
境内に一人立ち竦み、賢樹は溜め息をついた。

○●○●

夜。
その日は三日月が出ていた。
机に向かいシャーペンを走らせていた賢樹は、突然それを置き机を離れ、ベッドに寝転んだ。
「あー!!集中できねえ!!」
机の上に広げられた教科書には付箋やマーカーの跡。
どうやらテスト勉強をしていたらしかった。
両手を頭の下に置いた彼は、今日の初を思い出す。
（「私はあなたの事、仲間だって思った事無いから」）
「仲間じゃ、ないのか…」
少し寂しく思いながら、目を瞑る。
携帯電話の着信を知らせる音が鳴り響いたのはその時。
「!」
急ぎ身を起こし携帯を手に取る。

銀と白のそれは振動し、画面には相手の電話番号を表示している。
初の携帯番号だった。

「…主南？」

何かあったのだろうかと思い、発信ボタンを押す。

「もしもし」

〈出たか、『止まり木』。話は出来るか？〉

「その声…黄穂だったか？電話出来るけど…どうした？」

うむ、と相槌を打ち、黄穂は話す。
いつ聞いても黄穂の外見と声と、口調はミスマッチで、思わず賢樹は口だけで笑ってしまう。

〈手短に行きたい。初が今此の場に居ない内にの。話は一つ、最近の彼女の機嫌の悪さだ〉

それは今一番賢樹が気になっている事だった。
携帯の受話部分を強く耳に当て、黄穂の声を聞く。

〈大した事は無いんだがの、今初は不調なのだよ〉

「不調？」

具合でも悪いのだろうかと考えを巡らす。
だが反対の考えが賢樹の頭に入って来た。

〈絵が、描けていないらしいのだ。此の一ヶ月程な。今日もそのせいで部活動の先輩に怒られて機嫌が悪かったらしい。御前に悪い事を言ったと悔やんでおった〉

「……」

〈それからの、何やらぶつぶつ言っておったぞ。仲間じゃなくて、とな。何か分かるか？〉

はっとした。

頭に蘇るあの言葉。

（「私はあなたの事、仲間だって思った事無いから」）

「…分から、ない」

〈そうか。態々（わざわざ）済まないな〉

そこで黄穂は告げる。

〈『止まり木』よ、御主は只の『禽』の協力者では無い。心体の調整者でもあるのだ。其の事を忘れるでないぞ〉

「……分かった」

その時、電話の向こう側で小さな物音と人の声。

〈きほ、おふろはいって〉

〈分かった！…じゃあな、『止まり木』。初を宜しく頼むぞ〉

「…おう」

電話が切れた。
何だったんだ、言う代わりに溜め息をつく。

（…でも）

理由が分かった賢樹は、安堵して緩く息を吐いた。
だが、安堵の時にはまだ早かった。

○●○●

「行くわよ、成実さん。あの女を打ち負かしましょう」

「…はい」

深夜、三日月に見守られながら飛ぶ鳥。
みちるが腕に抱くのは、虚ろな目をした須藤　成実。
日中のままのセーラー服を風に舞わせ、操り人形のようにその身をだらんと下げていた。

襲撃の場所は主南神社。
音もなく降り立つのを、
黄穂が知った。

「…！！初、起きろ。蒼の『禽』が来た！」

「ん…え、『禽』？」

その言葉に初は跳ね起きる。

「気を付けろ、初。今の御前では何が起きるか分からん」

冷蔵庫から二つある大きな瓶のうち、一つを取り出して初はその中身を飲む。

「…水、にがい。…分かってる」

（分かっていないな）

寝惚けていたらしく、初は寝間着と裸足という格好で表へ出る。

『珠』は常に身に付けていたが、眼鏡は忘れて行った。

（電話も忘れて行きおった。仕方ない…）

初の携帯を手に持ち、発信履歴からすぐに「鳥居　賢樹」へ電話をかけた。

（気付け、『止まり木』…！）

その賢樹は、

「２ｌｏｇ２＝１だから…４ｌｏｇ２は…？」

先程のテスト勉強の続きをしていた。

翌日は休みなので、若干無理をしても平気なのだ。

「えっと…あー、２なのか。ダメだなこの辺…ん？」

誰もが寝静まった時間。
かかる電話の主はまたも初。
「今日は主南からやけにかかってくるな…もしもし」
〈『止まり木』、我じゃ。蒼の『禽』が現れた！〉
「黄穂か、蒼って…みちるか！？」
〈よく名は知らん！今直ぐ初と合流しろ！〉
賢樹は耳を疑った。
今すぐと言われても、思い黄穂に反論する。
「お前、どうやってこの時間に家出ろって言うんだよ！？無理があるだろ！」
〈どうにか為る！〉
「おいお…い？」
その音は実に曖昧。
コンコン、と表すには強く、ゴンゴン、と表すには弱く。
音の発生源は窓。
紅い衣服がひらひらと踊っていた。
「…主南？」
「開けなさい！開けないと蹴破っちゃうんだから！！」

○●○●

迎えが来た事で、賢樹は外に出られた。
だが迎えに来た本人は未だ寝惚けていた。

「うー、みちる、どこよお」

「俺が知るかよ。てか腰持って飛ぶな。前みたいに脇抱えろ」

「いーじゃない。もふもふしたいんだから」

謎の単語の後、初は賢樹の頭に顔を埋めたり、髪をグシャグシャと掻き回す。
その時、ふわりと漂う香り。
優しい髪の匂いと、

「…酒飲んだのか？」

「みせーねんは飲みません！たたかう前にお水飲んだだけ！」

それだ、と賢樹は頭を抱える。
若干の寝惚けと酔いが初をおかしくしていた。

『星氷欠片！！』

五つの氷柱が背後から飛ぶ。
吐きそう、などと言いながら危うく初は全てを避けた。

「余裕みたいね。いつまで持つか分からないけど」

「…はい」

「主南、みちるいたぞ」

前を向いて飛ぶ初はそれを聞いて方向を変える。
そこに戦略はなく、

「おらー、こわいだろこわいだろーっ」

「止めろ！！ビルにぶつかる！！」

酔って性格の変わった少女は空中で遊んでいた。
やがてそれに飽きたらしく、初はビルの屋上に賢樹を降ろした。

「疲れた。腕広げなさい」

「こうか？」

賢樹が広げた腕に、初は飛び乗る。
『止まり木』の力により、座る初の重さは全く感じられない。

「これ良いわね。次からこうね！」

「分かった…」

（腕疲れそうだけど良いか。…すごい笑顔だし）

可愛らしい笑顔を振り撒きながら初は哥う。
それは丁度追い付いたみちる達には不意打ちと同義。

『我が喜びを如何に伝えよう。我が喜びを何で伝えよう。我は知っている、その術を。我が内に満ちる力が其を教える』

人差し指でみちるを差し、賢樹に笑い掛ける。

『ありがと。さかき好きー』

「！？」

『嬉気（きき）・溢火（いっか）！』

火炎放射機のように、初の指から炎が噴射される。

「な、何この力！？…『星霜防壁！！』」

咄嗟に盾を作るみちるだが、加減を知らない今の初には太刀打ち出来ない。

しかし、

「飽きた」

「「…は？」」

重なる賢樹とみちるの声。

その原因の初はいきなり攻撃を止め、賢樹に頬を寄せてきた。

「えへへへ～」

「お、おい主南、キャラ変わりすぎ…」

「ういって呼んで！」

頷くしか、賢樹は出来なかった。
頭をくしゃくしゃと撫でられ、頬擦りをされ、終いには頬にキスを受ける彼は、気恥ずかしさに顔を染める。
それを見て喋ったのは、操られている筈の成実であった。

「…あなたが、いけないのね。主南さんが絵を描けない理由はあなたね」

「え…？」

「離れなさい、主南さんの為に…！！」

怒る成実を見て、みちるは哥う。
笑いながら。

『舞踊霜子！！』

（すごい、これが『止まり木』の力なの…！？）

吹き荒れる雪が容赦なく二人を打つ。
その強さはいつか彼女が呼び出した氷の鳥の比ではなかった。
力の増したみちるの『哥』は、肌に当たると熱を持ち火傷のような凍傷を作った。
勢いも強い為このままずっと立ち尽くしていれば五分と保たないだろう。

「うぅ、寒い」

初は賢樹を抱えて飛んだ。
しかしその格好は所謂お姫様抱っこであった。
「な！？馬鹿、それはないだろ！！」
「あは、照れるさかきかわいー」
しかし打ち付ける吹雪は冷たく。
遂に初は顔をしかめた。
『我等を邪魔する者、全て滅せ…赤怒（せきど）・遣風（つかいかぜ）』
翼で巻き起こした風は色付いていた。
ぶつかりあう吹雪と風、勝ったのは風の方だった。
手加減なしのそれに煽られ、成実とみちるは吹き飛ぶ。
「よっしゃー！」
（…酔わせたら危険だな。こいつには甘酒でも近付けないようにしよう…）
はあ、と溜め息を密かについて、少し眠そうにする少女を見て複雑な顔をする。
（あれは、何なんだ？）
渦巻く考えの中心には初の言葉。
だが、と賢樹はビルより上を飛ぶ紅い鳥に言う。

「…初！途中で寝たら承知しないからな！」

「はーいっ」

少女は元気に、笑顔で答えた。
長い夜が、終わろうとしていた。

五．隠れた気持ち　～We aren't friend, but…～（後書き）

飲酒は二十歳になってから、飲酒運転はしちゃいけません。

閲覧、ありがとうございました。

六．助言 ～Wonderful picture, It's name i

（『ありがと。さかき好きー』）

（あれ、どういう意味だよ）

深夜の戦闘から一日過ぎた、午前一時半。
床に就いて三十分、賢樹は昨夜の初の言葉に苦しめられていた。
それや、頭を撫でられた事等がぐるぐると頭の中で回り、ある事象を作り出していたのだ。
動揺、詳しく言えば、鼓動の高鳴り。

（酔ってたから覚えてなさそうだし、どうすれば良いんだよ…）

考えた末、一人の人物を思い付く。

（やっぱり、話した方が楽になるよな）

思い、賢樹は目を閉じる。
彼はすぐに夢の中へ入って行った。

○ ● ○ ●

同時刻、主南神社。

（私とした事が、寝惚けてお酒飲んじゃったなんて）

初もまた、眠れぬ夜を過ごしていた。
やはり、彼女は昨晩の出来事を覚えていなかった。

酒を飲んだ事も黄穂に言われて知った事だった。
何をしたのかなど、断片的にしか覚えていない。
どうしようもない高揚感、それに付随した行動しか。

（…好きとか。何言っちゃったんだろ）

それがどういった意味で言ったのか、彼女自身分かっていなかった。
人としてなのか、それとも。
ただでさえスランプに陥っているのだ、彼女のキャパシティは限界を迎えようとしていた。

（…はあ、何だか、頭が重い…）

ようやく襲う睡魔に、身を委ねる。
ぼんやりとする頭で、最後に初は考えた。

（…とりあえず、何があったか、聞か、なきゃ…）

そのぼやけた頭は、睡魔だけではなかった事を後に彼女は知る。

○　●　○　●

休日明け、そして定期テスト一日目。
三時間と早くに学校が終わった賢樹は、一度家に帰った後ある家に向かった。
インターホンを押して数秒、足音の後ドアが開く。

「よっ。お前が家（うち）に来るなんていつぶりだ？」

「ゴールデンウィークぶり。大した間（ま）じゃねえだろ」

佐久間　隼。親友の家であった。

「どうした？テスト期間中は直帰する真面目クンが？…あ、飲み物どうする？」

「茶で。んー、ちょっとな。解決しないと勉強もろくに出来ない問題なんだよ」

「なんだそりゃ。じゃあ麦茶でいいな」

幼馴染みの特権で隼の部屋に無断で上がり、中を観察する。
扉からすぐ見えるのは机、その横にはベッド。
壁に備え付けられたフックには制服や上着がかかっている。
片付いた部屋を見て賢樹は茶化す。

「お前の部屋、こんなに綺麗だったか？」

「うるせ。お前の為に綺麗にしてやったんだ、ありがたく思え」

「へいへい」

部屋の主が麦茶の入ったコップを持ってやって来た。
一つを受け取り適当な場所に賢樹は座り、それを飲む。
隼は机の椅子を引っ張り出し、普通と反対に座ってやはり麦茶を飲んだ。

「あっつくなってきたなー。悪いな賢樹、冷房ない部屋でさ」

「飲み物出されるだけでもありがたいよ」

「どーも。で、何だよ話って？」

頷き、賢樹は隼を目に捉えて話す。

「この前、ある女子に言われたんだよ。…好きって。その意味が分からなくてさ」

「…あの子か？前お前と一緒にいた、セーラー服の」

「ああ。ちょっと酔っ払ってたみたいでさ、その酔った勢いみたいな感じで」

酔う、という事に関しての質問は、ジュースと間違えて飲んだらしいと誤魔化す。

とても、自分達の敵が深夜に襲ってきた時に水と間違えて飲んだとは言えない。

「…ふーん、つまりそれがライクかラブなのか分からない、と」

「ああ。覚えてないだろうし、固い奴だから面と向かって聞いても本当の答えなんて言わないだろうし」

「それでなんだがな」

持っていたコップを机に置き、隼は問う。

「お前は聞いてどうしたいんだ。あのセーラー服の子を」

「…どうって、言われても」

「困らせたいんじゃないんだろう？ただその『好き』の意味を知りたいだけだろう。
だったら待て。次、素面（しらふ）の時に言ってくるまで。言って来たらラブ、言って来なかったらライク。ほら、解決した」

言葉が出なかった。
とても美しいものを見た時のような気分か。
そこで隼は問うた。

「とりあえずこれははっきりしとこうか。
…お前はセーラー服のあの子の事、好きなのか？」

「……」

賢樹は考え込む。
その思考を打ち消したのは一つの着信。
渦中の人、主南　初。

「ごめん、隼…もしもし」

〈今どこ。黄穂がみちるの力を感じたって。迎えに行くから場所を〉

「あ、えっと、友達の家。…分かったよ、後でな」

一分とかからず会話を終える。
通話の終了を見て取り、隼は聞く。

「あの子か？」

「…まあな。悪い、用事出来た。また今度遊ぼうな」

「…ああ」

早足で賢樹は隼の家を出た。
その直後、隼はネイビーブルーの携帯電話を取り出した。
少しの操作の後、耳に当てる。
相手の応答を聞き、彼は告げた。

「急げ。取られるぞ、あの女に」

その顔に浮かぶ表情は、焦りでも困惑でもなく。
怒りであった。

○●○●

「…主南！」

「…御免なさい。折角友達に会っていたのに」

「大丈夫、行くぞ。今度こそみちる、どうにか出来るといいな」

頷いた初はあの裾の短い着物を着た。
しかし前日から赤いズボンを履くようにしているので、もう中が見える心配はない。
賢樹を抱えて飛んだ初は、自身の高校へ向かった。
その屋上に、蒼と黒が一点。
もちろん、みちると成実である。

「待ってたわよ。あなた、自分の学校なのに来るの遅いのね」

「『止まり木』がいればすぐに来れた。…今日こそ、その『碧』鎮めるから」

二人は哥う。
これが『禽』の開戦の仕方。

『駆けろ、我が『哥』。花のように美しく、鳥のように疾く…火鳥・走花！』

『雛鳥飛晶！！』

互いが生み出した炎と氷の鳥がぶつかり、砕ける。
それを当然のように無視し、新たな『哥』を紡ぎ出す。

『揺れる我が羽根はどこまでも遠くへ。風の中、果ては月まで…風羽・征月！』

『飛羽乱撃！！』

二色の羽根が翼から離れぶつかり合う。
運良くぶつからなかった羽根は初とみちる、二人の服に肌に傷を付けていく。

「『水月刺刀！！』…消えろ！！」

輝く氷の剣を作り出し、みちるは突進する。
しかし剣が初を貫く事はなく、彼女は上に逃げていた。

『其は我の望む物。其は焔。我が身に色付く紅く猛る光。其が我の

焔ならば、滅せ、我に仇なす者を…炎球・狂咲！』
手に集められた炎がみちるを穿つ。
爆発。
煙の晴れた後には大きなクレーターが出来ていた。
成実の腕で手足を組んで笑うみちるは声を飛ばす。

「いいの？こんなに学校壊しちゃって。誰かに知れたら大変じゃない？」

「いつも知られない為に哥ってるわよね。何だっけ、『哥』の名前」

「『六花衛膜』。いつもあたしが周りの配慮してあげてるんだからありがたく思いなさいな」

そうね、と初は感謝の言葉を投げる。
更に彼女はけど、と続ける。

「そんなだからいつも負けるんじゃない？」

「あんた…っ！！」

哥い合いが続く。
その様子を黙って成実は見ていた。
殆どの体の自由がない彼女は、ただ考える。

（学校と今、どうしてあの子はあんなに違うの…？）

みちるをからかいながら戦う紅い鳥は確かに笑っている。
ふいに方向を変え彼女は『止まり木』の腕に腰掛ける。

何かをそれに言う彼女は生き生きとしていて、みちるの攻撃を跳ね返していた。
そしてまた飛び立つ。笑顔のまま。
『止まり木』もまた笑顔で見送る。
その笑みは、未経験の彼女も知っていた。

（確かな信頼、曇りのない笑顔…ああ、そうか）

傍観者は悟った。

（やっぱり主南さんが絵を描けないのは、あの人がいるからなのね）

「……みちる、さん」

自分に出来得る最大限の声を出す。
聞き付けた蒼い鳥は優しく問う。

「何かしら？」

「あの男に、攻撃したい。力を、下さい」

「分かったわ…『巨氷砕指』」

『哥』により強化された成実は、みちるが力を回復して離れるとすぐに賢樹に向かった。

「わ！？」

強化されていなかった賢樹は紙一重で避けるがじりじりと後退していく。

無表情の成実は、ぶつぶつと呟いていた。
「あなたがいるのがいけないんだわ。早く消えなさいよ」
「か、勘弁してく、…！！」
「あなたの存在が、主南さんを、苦しめる。だから、失せなさい…っ」
叫べない成実は苦しそうにそう言って賢樹の腹を殴った。
強化された女の拳で、危うく賢樹は胃の中を空にしようとする。
強引にそれを耐え、腹を押さえながら彼は聞いた。
「意味、分かんねえよ！！俺とあいつは『禽』と『止まり木』、嫌でも必要な存在なんだよ！」
「私みたいに操られれば、誰でもそれになれる。あなたは、必要ない」
「…分かってんだろ！！」
戦う二人にも、その声は届いた。
思わず『哥』を止め、眼下の少年を見遣った。
「お前、あいつの事少しは知ってんなら分かるだろ！？あいつが、主南がそういう事出来ない奴だって！！」
「……」
「分からないなら今分かってやれ！あいつは、主南　初は不器用で

無愛想で無口だけど優しい奴なんだってな！！」
成実は言葉を失い、立ち尽くした。
それを見て舌打ちを一つ、みちるが降りて来た。
「ちょっと、どうし…っ」
肩に手をかけようとした彼女は、その手を引っ込めた。
（戦意の喪失で『哥』の力が切れかかってる。もう『止まり木』になれる可能性はないわね）
「…今日はここまでにしておくわ。また今度戦いましょ」
成実を置いて、みちるは去った。
初は追跡をせず、鼻を鳴らしてから賢樹の隣に降りた。
膝を付いていた成実に、初は言う。
「…先輩、ごめんなさい」
「…私はやっぱりあなたの事、何も分かってなかったのね。いえ、分かろうとしてなかったのかもしれない。あなたが余りにも素晴らしいから」
「私も、色んな事から逃げてました。先輩にも、…鳥居君にも」
横に立つ『止まり木』を見て、初は笑う。
賢樹もそれを見て笑みを深め、手を少し上げた。
それは、合図。
今日の勝利の、祝いの合図。

「何にせよお疲れ、主南」

「…うん」

初も同様に手を上げ、それを二人は合わせ鳴らした。
高い音が心地の良い余韻を響かせる。
『哥』の束縛が切れ倒れる直前、須藤　成実は思う。

（やっぱりこの人がいると違うのね。主南さんが元気に、明るくなる。…いなきゃいいのに）

（主南さんに、好きな人なんて）

○　●　○　●

夏休みが前日と迫っある日の放課後。
キャンバスに向かって、一心不乱に筆を動かす初がいた。
そっと美術室の中に入った人が、その様子を見る。
初は何かを言いながら絵を描いていた。

「私、無愛想なんかじゃないもん…」

音を立てないように椅子に座った何者かはそれを聞いて笑窪を作る。
それから数時間して、ようやく初はパレットを置いた。

「ふう…」

「お疲れ様、主南さん」

「っ！？」

本を読んで暇を潰していた須藤　成実は、驚いて騒音を作る初に笑顔を向ける。

「スランプは脱出したようね。スムーズに筆が動いていたから」

「…いつから…」

「私、無愛想なんかじゃないもん」

額を押さえ、初は息を吐く。

僅かに染まった頬を気にしつつ、眼鏡を直して彼女は聞いた。

「それで、今日は何の用ですか」

「単なる忘れ物。ただあなたの邪魔をしたくなかったから待ってたの」

数日前より態度が軟化した成実は、近付いて初の作品を見た。

「…素敵な絵。優しくて、なんだか癒されそう。こんなのを描いてみたいわね。…これ、誰かに似てる気がするけど」

「ありがとうございます。誰かに似てるなんて、気のせいですよ」

「題名は？」

目を細めた初も絵を見る。

真っ赤な鳥が人の指に留まろうとする、そんな絵だった。

「まだ決めてません。どうせなら先輩が付けて下さい」

「私じゃ駄目よ、あなたの作品なんだから。候補はあるの？」

はい、と小さく頷いた初は、頭に浮かぶその絵の名を告げる。

「…『居場所』、です」

夏の陽が、キャンバスの白を眩しく輝かせていた。

六. 助言 ～Wonderful picture, It's name i

大幅に更新遅れてしまい、申し訳ありません。
閲覧、ありがとうございました。

七．それぞれの夏　～Ｂｌａｃｋ　ｇｅｍ～

蝉が煩く鳴く。
どこかの民家で風鈴が揺れた。
月捲りのカレンダーは八月、正確に言えばその初旬。
鳥居　賢樹は忙しく動かしていたシャープペンを今、勢い良く置いた。

「終わったーーー！！」

伸びをして筆箱に文房具をしまう。
夏休みの課題やその他諸々が乗っていた机の上を片付けた所で、携帯が鳴った。
着信。相手は、

「坂口？」

真姫だった。

「もしもし。何だ、坂口？」

〈やっほーサッキー！あのね、隼と考えたんだけどね。今度海行かない？隼とサッキーとあたしと、あのセーラーの子で！〉

「海？てか何で主南？」

えっとね、と真姫は若干考え込んで説明する。

〈三人で遊ぼって話になって、で、女あたしだけじゃ危ないからも

う一人って事で、えっと、にしなさん？を呼ぶ事にしたの〉
「なるほどな。分かった、話つけとくよ。じゃあ後でな」
〈はーい、良い返事待ってるね！〉
真姫との電話を切り、賢樹はアドレス帳を開いて「主南　初」のメールアドレスを呼び出す。
先程の計画を文にし、送る。
五分程の後、着信が来た。
「もしし、どうだ主南？」
〈…いきなりの誘いが海、しかも知らない人が殆ど。恥を曝す気？〉
「そんなつもりは。嫌なら断ってくれて構わないぞ」
〈…行く〉
賢樹は目を一回、しばたかせる。
その沈黙の意味が分かったのか、初は言葉を繰り返した。
〈行くわ、海。『玉』の捜索にもなるし、何より男二人に女一人なんて、その子が肩身の狭い思いする〉
「分かった。じゃあ伝えとくから。詳細はまた今度な」
〈うん。それじゃ〉
時間にして、二分に満たない会話。

事務めいたそれを彼女らしいと思いながら、賢樹は席を立った。

○　●　○　●

それからおよそ二週間。

「着いたー！」

「あっちいな、日焼け止めしても焼けんな、こりゃ」

海にやって来た四人は眩しく照りつける太陽に口々に文句を言った。

「晴れ過ぎだろ。少しは曇れよなー」

「…文句言っても仕方ない」

「だよな。よし、向こうの海の家で着替えようぜ」

一行は賢樹の提案通りに海の家へ向かう。

黙々と着替えを進める男二人に、黄色い声が届いた。

「…主南さん、胸結構ありますね」

「…え」

「こうしちゃえー！おりゃ！」

「ひあっ！？ちょっと、坂口さん…っ」

隔てられた壁一枚向こう、初と真姫がじゃれあう。

思わず二人は作業の手を止めていた。

「お主、Cはありますな？細いのに、うー、羨ましい」

「細くないです、それより坂口さんの方が…お返しです！」

「きゃんっ！もう！」

ぼうっと薄い壁を見ながら声を聞いていた賢樹に、肘でつついてきた隼が言う。

「Cはあるってよ、初ちゃん」

「知るか。真姫も負けず劣らずだとよ」

「……早く入ろうぜ、頭冷やしてえ」

「同感」

その後、素早く着替えを終えた男二人は、海の家の前で女二人を待った。

雑談をしていると、

「お待たせサッキー、隼！」

白い砂浜に、より白い肌の二人が海の家から出て来た。

声を飛ばした真姫は黒いビキニだった。

トップはホルターネックで、縁を小さな白いレースが覆っている。

フリルが二重に広がるボトムは黒の大人らしさとそれの可愛らしさ上手く調和していた。

髪の両脇に小さく作られた団子が頭部を涼しく見せていた。

「……べ」

「なんか言ったか、隼？」

「…いや、何も」

そんな真姫の後ろに佇む初は、白と赤のパレオビキニだった。
下から炎が立ち昇るように赤が色付くというデザインで、下半身を覆うパレオも同様だった。
いつもは下方で二つに結んでいる綺麗な焦げ茶の髪は、ポニーテールにされていた。
シンプルだが大人びたように見えるそれに、ほんの少し、賢樹は目を奪われた。

「…何」

「あ…いや」

初は手で胸元を隠した。

「気を付けてね、初ちゃん。サッキーだって一応男の子なんだから」

「勿論」

「いつの間に仲良くなったんだよ、お前ら…」

そうして始まった休日を、四人はひたすら楽しんだ。

「サッキー、ここ、どうしよう…」
「よし、こうして…っと」
「…下品」
「おい賢樹お前何しやがった！？」
隼を砂の中に埋め、
「坂口、もうちょい左…そこだ、いけっ！！」
「えーい！！」
「いっってええぇぇぇ！！！！」
「…ご愁傷様」
スイカの代わりに賢樹が叩かれ、
「食らえー！！今必殺の」
「フェイント」
「……なんだよあの強さ…」
「ついさっき会ったばかりだよな、息合いすぎだろ…」
女二人が男二人を完膚無きまでにビーチバレーで叩きのめした。

（…にしても良かった、楽しそうで）

真姫と手を叩き合う初を見て、賢樹は思った。
孤立の可能性があったのだ、彼は密かに安堵していた。

○●○●

「…それじゃ、ちょっと、着替えてくるな」

「初ちゃん！荷物番よろしくね！」

雲が空に広がり始めてきた夕方。
初と賢樹の二人は、真姫と隼がいない間の留守番をする事になった。
いなくなって数分、留守番役の賢樹はふと何かを思いついて、財布を持って立ち上がった。

「…どこ行くの？」

「かき氷買いに。あ、食うか？」

「…苺」

了解、と賢樹は走って海の家へ向かう。
更に待つこと数分、苺とブルーハワイのかき氷を持って、賢樹は戻ってきた。

「苺。にしても遅いな、あいつら」

「ありがとう。…佐久間君は優しいから、真姫ちゃん待ってるのかも」

先をスプーンの形に加工されたストローで氷をつつく。
青い氷を口に入れようとした、その時だった。

「…っ、……雨だ…」

「避難しましょう。その鞄持って」

いくつかの鞄を持って、小走りで海の家の屋根に駆け込む。
雨は段々強くなり、その音が聞こえる程となった。
屋根の下に鞄を下ろし、はあ、と賢樹はため息をついた。

「なんだよ…あんな晴れてたのに」

「願い叶ったじゃない。曇ってほしいって」

「雨はいらなかったし、今更曇ってもな…」

濡れていく砂浜を見ながら初はかき氷を口に運ぶ。
氷の冷たさと苺シロップの色で、初の唇は真っ赤に染まっていた。
その口から、言葉が発される。

「…前に、あなたは仲間って思って無いって、言ったの憶えてるかしら」

「…ああ」

小さな痛みと共に、記憶が映像を見せる。
きつい視線を向けた、初の姿。

（「私はあなたの事、仲間だって思った事無いから」）

「それ、きつい言い方してごめん。本当は」

雨が海を叩き、交じる。
手からの熱で、かき氷が下から融ける。
静かな時が流れた。

「…あれ？なんでサッキーここに…うわ、すごい雨！」

「お前らも着替えろよ、寒いだろ？」

「っ！…あ、ああ」

かき氷を置いて、二人はそれぞれの鞄を持って更衣室へ向かった。
その後、初と真姫が持っていた折り畳み傘に入って四人は駅まで歩いた。
電車に乗り、途中で真姫と隼と別れ、また二人きりになる。
しかし二人は、一度も言葉を交わす事なく、別れた。

○　●　○　●

帰宅の後、水着を洗濯籠に入れてから、賢樹は自室のベッドに寝転んだ。
目元を腕で隠し、少し前の過去を思い出す。
それは、潮と雨の匂いの記憶。
紅く頬まで色付いた少女の口唇からの言葉。

（「きつい言い方してごめん、本当は、そんな意味じゃなかったの。
…仲間じゃなくて、……いなきゃいけない人って、言いたかったの」

）

「……なんだよ。つまりは……」

その先の言葉はなかった。

眠りに落ちたのと、確証がなかったからだった。

○　●　○　●

賢樹の家から遠く離れた場所。

日本ではなく、ある中東の国。

ラピスラズリをちりばめたような夜空を、みちるは家屋の中から見ていた。

「砂漠と星空って、妙に合うわよねえ。昼はかなり暑いけど、やっぱり夏はここが一番ね」

夜空に自身の『碧』を透かす。

背景の蒼と重なり、何とも言えない色合いを『碧』は作り出した。

「…あたしの『止まり木』も、こんな夜空を見ているのかしら、なんて」

涼しい風が、肩に付かない程度の彼女の髪を揺らした。

○　●　○　○

それぞれの、夏の夜。

賢樹と初は、互いへの思いを巡らせ。

「「……」」

真姫は賢樹を想い、嘆息し。

「……賢樹、くん…」

隼は携帯に向かって苦々しげに呟き。

「はっきりしろよ、何も知らない癖に……」

みちるは星空を見上げる。

「早く会いたいわ、あたしの『止まり木』……」

その日、誰かが散歩中に何かを蹴った。
蹴った何かは光っていた。
翼を広げたように、黒く。
それを見て、誰かは笑った。
それらは新たな、波乱の始まり。

七．それぞれの夏　～Ｂｌａｃｋ　ｇｅｍ～（後書き）

遅くなってしまい、申し訳ありません。

閲覧、ありがとうございました。

八．囚われる者達　～interlaced love～

夏は終わり、秋が始まって早一月。
今日も賢樹は鞄を持って学校へ向かう。
しかし、校門には大きな建造物。
賢樹の通う高校、『蒼雲高校』のマスコットキャラクター、『イグルン』と呼ばれる鷲の巨大なアーチがあった。
アーチの下方、イグルンが止まる白い木には「第六十五回蒼雲高等学校文化祭　鷲空祭（しゅうくう）」の文字。

「昨日があんなだったし…今日はまた大変そうだな」

軽くため息をついて、彼はアーチをくぐった。

「サッキー！やっと来たー！

「ほらマント。吸血鬼役に代役はいないんだからな」

薄暗く作られた教室の一角に鞄を置くと、いつものように真姫と隼がやってきた。
彼等のクラスの出し物はお化け屋敷。
賢樹はその吸血鬼役だった。

「代役ぐらい作っとけ。牙は？」

「サッキーがマント着たら渡すよ。暗いから落としたら困るし。ところでさ、私の格好、似合う？」

言われて賢樹は真姫を見た。

真姫は悪魔役であったが、どう見ても彼女は小悪魔であった。
かなり裾が短いスカートの下に覗く足は、いつもの黒いニーハイソックスにガーターベルトが付いている。
学校側の事もあり、上は臍が見える程度に短いVネックの黒のTシャツである。
口には小さな牙が覗き、目元を強調した化粧に爪も黒く塗ってある。
そして真姫が一番見てほしいポイントに、彼の目がいった。

「それ…」

「…うん！どう、似合ってる？」

「うん、すごく。今回の衣装にもよく似合ってる」

言うと真姫は嬉しそうに笑った。
前日が彼女の誕生日だったので、賢樹は第一日目の終了後、かつて彼女の為に買ったそれを渡したのだ。
なのでリボンが真姫の髪に飾られたのはこれが最初であった。

「坂口、いつの間にそんなの持ってたのか？」

「うん、持ってたよ。と言っても昨日サッキーから貰ったんだけどね。サッキーは隼と違って、私の誕生日ちゃんと覚えててくれてるんだよー！」

「そうかよ、悪いなー覚えてなくてよー！」

そんな会話から、文化祭二日目は始まった。

「「がああぁーっ！！」」

「きゃあああぁーっ！！」

二人がかりで相手を驚かす。
走って次へ進んだ客を見送って、小声で賢樹と同じ格好の隼が喋る。

「疲れたな…今何時だ？」

「待て……十二時だ。交代だな」

「よっしゃ、じゃあ宣伝兼ねて他のクラス回るか」

二人は後半の驚かし役と交代してから教室を出、様々なクラスを巡る。
そうして一階に降りていく二人の目の前に、

「…鳥居、君？」

「…主南」

夏以来、二人は会っていなかった。
こうして顔を合わすのは数日ぶりとなる。
初の格好はキャスケットに細い肩紐の赤いチェックのチュニック、白い半袖のインナー、それに七分丈のジーパン。
いつかに賢樹が買った十字架のペンダントが首で光っていた。
今は学校側が配ったスリッパを履く彼女は、その音を小さく立てて歩み寄る。

「…久しぶりね。その格好…お化け屋敷か何か？」

「まあな。後でちょっと入ってくれると坂口とかが嬉しい、かな」
「お前がじゃねーのか？」
肩に腕をドンと置き、隼がそう賢樹をからかう。
肩に寄せた賢樹はそれに反論しようとしたが、先に初が口を開いた。
「今日は、佐久間君。クラスは何組ですか？」
「あ、どうも。えっと…E組です」
「有難う御座います。一つ言っておきますが、私が文化祭に来て鳥居君が喜ぶ事は無いと思います」
言うと素早く初は階段を上って行く。
見送る賢樹に、
「行けよ」
隼の声がかかる。
「隼？」
「お化け屋敷はカップルで楽しむのが一番、マント預かっててやるから行って来い」
牙を見せ隼は笑う。
「主南は単なる友達だよ。とりあえず行って来る、よろしくな」

マントを隼に手渡し、賢樹は走って階段を上る。
駆け上がる音が小さくなった時、残された友は酷い憎しみを顔に浮かべて呟いた。

「はっきりしろよ。お前の態度があいつを悲しませんだろうが…」

影が、彼を見つめていたそれが動いたのは、その時だった。

○●○●

「主南！」

「…鳥居君、佐久間君と一緒じゃなかったの？」

「えと…なんか、行って来いって言われた」

そう、と素っ気なく応じて初は歩いていく。
何か言わなければと焦る賢樹に、小さく彼女は聞いた。

「『ファントム・アパート』…ここ？」

「あ、ああ」

行列の最後尾に並び、周りを見渡す。
無表情かと思われる彼女の口が歪んでいる事は、既に賢樹には分かっていた。
十五分と中途半端な待ち時間。
ようやく入口に辿り着いた初達は受付の者から説明を受けて暗い室内に足を踏み入れた。

「目見えるか？」

「…あまり。けど力を使う時よりはマシ。結構夜目利かないから」

軽くYシャツを引っ張られた感覚で、賢樹はそれを見た。

怖いのだろうか、初の白い手が袖を握っていた。

顔も若干強張っている彼女に、初はいつも通りの口調で諭す。

「大した事ねえよ。たかだか文化祭のお化け屋敷、遊びだって」

「…違うわ。見えないから掴まってるだけよ」

強がりを聞き流しながら、賢樹が先頭で歩き出す。

彼は当然、お化け屋敷の構造を知っていた。

なので先に歩いてお化け役と出くわし、驚きを軽減しようと考えたのだが。

「ま、待って、鳥、居君っ」

少し涙目になりながらそう言う彼女には逆効果のようだった。

「ぁがああぁぁぁー…！！」

「ひっっ……！！」

腕ごと袖を引いて身を縮める。

普段の冷静で強い彼女はどこへやら、今の初は完全にか弱い女の子でしかなかった。

「…とりい君の嘘つき。恐いじゃない。もっと恐くないと思ってた

のに。これは遊園地のお化け屋敷レベルよ」
「大丈夫だって主南。皆俺のクラスメ「……かの…じょ……？」
「……戸部？」
賢樹は今初を驚かしたゾンビこと、友である戸部を見つめた。
絵の具で塗られた目元に、狂気が見て取れた。
「野郎共！！鳥居が、賢樹が女連れてやがるぞー！！！！」
「なんだと！？奴に女…許せん！！」
「鳥居君はリア充なんですね、分かります…！」
四方八方からざわめきが起こる。
「えっと…鳥居君…」
困り果てる初は薄暗い教室を見回す。
その時、ある一人の足音。
「まったく、なんでこんなザワザワしてるの…」
眉根を寄せてやって来た、真姫。
二人の姿を見て、表情を凍らせた。
「初ちゃん、サッキー…」
「おう、坂口。今交代か？」

そこで賢樹は、周りの空気が冷たくなっていくのを感じた。
冷房だけが原因ではない。
下を向いた真姫は、また顔を上げるが、

「…もー！二人共、付き合ってるなら付き合ってるって言ってよー！びっくりしたじゃん！」

「違う、違うわ真姫ちゃ「嘘言わないでよ。」

その笑顔に、目だけはついていっていなかった。
初の言葉を遮った真姫は、走って教室を出て行った。

「坂口！！」

賢樹は真姫を追う。
初は、追わなかった。

「…あの、追わないんですか？」

戸部は初に尋ねる。
答えは小さく、はっきりと返った。

「勿論。私が行ったって逆効果ですから。…これは、あの二人の問題…」

演出の為に動く扇風機の起こす風で、彼女の髪がふわりと靡いた。

○　●　○　●

「おい！坂口！！」
真姫を追いかける賢樹は、
「…あれ、どこ行った…？」
途中、彼女を見失った。
「…最悪だ……」
「……」
それを、真姫は物陰から見ていた。
走り去る彼を見送り、彼女はふうと息をつく。
「…サッキー…」
「あら、失恋？」
突然の声に驚き振り返ると、そこには自分と同じ年程度の少女。
少し薄めの黄土の髪に、茶色いつり目気味の瞳、笑みを形作る薄桃の唇。
水色のワイシャツに黒いベストとショートパンツ、群青と黒のボーダーニーハイ。
少女は真姫に問う。
「…どうしたの？詳しい理由は分からないけど、あなた、泣いてるから」
「……っ！」

真姫は慌てて目元を拭う。
傷心の彼女に、少女は囁く。

「…あたし、手伝うわ。あなたの恋路」

「…え？」

希望と疑い。二つの感情がない交ぜになった顔を向け、真姫は少女と目を合わす。
その瞳は、ひたすらに冷たかった。
氷のように。
笑み等全く感じられないその目で、真姫を映す少女—みちるは妖しく、誘う。

「あなたがあたしの願いを叶えてくれたら、いくらでも…」

○●○●

「…どこにも、いねえ…っ」

賢樹は教室の前に戻り、荒い息を整える。

「…見付かっていないみたいね。…手伝うべき？」

「いや、お前が出て来たら話が、こじれる。大丈夫だ…」

「そう。…鳥居君、あれ」

顔を上げた賢樹は、初の指差す方を見た。

ふらふらと、階段を上る真姫の姿がそこにあった。

「坂口！」

賢樹はまた走り出す。

そこで真姫は踊り場を通過、姿が見えなくなる。

「……」

それを見て、初も後を追った。

小走りで鞄の中をまさぐりながら。

○●○●

「待てよ坂口！」

歩く真姫の後を追いながら、賢樹は階段を駆け上る。

二人の速度は変わらない、なのに賢樹は真姫に追い付けなかった。

やがて、真姫は屋上へ通じる扉を開け、表に出た。

そこで賢樹は気付くべきだった。

普段は堅く閉じられている筈、今日も例外でないその扉が、簡単に開いた事に。

「坂ぐ「『凍塊一滴！！』」

賢樹の頭程、澄んだ色の氷が目の前に飛び込んだ。

「……っ！！」

腹に吸い込まれたそれは、賢樹を壁に貼り付ける。

したたかに打ち付けられた頭と背は悲鳴を上げる。
肺から空気を全て取り出された。
重力に従って踊り場の床に落ちた。
霞む視界で、それでも賢樹はみちるを睨んだ。

「ふふ…良い目。ねえ、真姫さん？」

「……」

問われた真姫の目は、どこか虚ろだった。
初の先輩と同じ、痛む頭で賢樹はそう思った。

「…真姫を、解放しろ」

「嫌よ。今回の『止まり木』は彼女だし。それに彼女が望んだの」

ゆっくり上げられた華奢な腕に、みちるは座る。

「…嘘だ」

「…嘘じゃないよ、サッキー」

その呼び名を使うのは、一人だけ。

「…真姫…」

「みちるさんは…願いを叶えてくれるの。だkらみちるさんのお願いを叶えるの」

「ほらね、『止まり木』さん。残念ながら今回も、あたしの『止ま

り木』じゃないけど…」
みちるは真っ青な瞳を向け、冷やかに笑う。
「彼女は、今までの誰よりも強い」
○●○●
「…あった」
その目に『珠』を映し確認、初は即座に赤い衣を纏う。
空気を掴み舞い上がり、開かれた屋上の扉をくぐる。
「……」
広がる光景は、凄絶。
笑うみちるに腕を貸す真姫が怯える程に。
コンクリートには所々に血痕が付き。
あちらこちらにみちるの氷が光っていた。
そして、ある一箇所には血溜まり。
赤く染まって地に伏す、男の姿。
「鳥居君！！」
飛び、彼の元へ。
抱えた頭からは今も出血が続く。
意識は無い。
「…みちる！！」

「だったら常に一緒にいなさいな。彼女の怒りを買うけどね」

みちるは意地悪くそう言い、傍らの真姫を見た。

冥い瞳に、倒れ伏す賢樹と傍らの初が映っていた。

「…さて、今日こそその『珠』を渡しなさいな。それを集めれば願いが叶う」

初はみちるを睨むまま、何も言わない。

「『止まり木』が気絶すれば、力の供給は途絶える。いつまで保(も)つかしらね、あなたの力！？」

青い『禽』が動く。

『願う。我の力の変容を。外に燃えず、内に燃えろと。魔を祓う光は、汝を今癒す…療身(りょうしん)・包羽(ほうば)』

早口で言うと初は、賢樹を横たえ彼の前に立つ。

「保たせてみせるわ。『炎球・狂咲』」

（早く起きて、鳥居君…！）

○　●　○　●

最後に見たのは、少女の悲しい顔だった。

（坂…口…）

闇の中で、彼の意識は漂う。
ぼんやりとしたその中で、彼は一点、白を見つけた。
（…何だあれ。あの世なのか…？）
その点は近付き、大きくなる。
目の前に現れたそれは、純白の鳥。
（…何だ、こいつ…）
『我が主、こいつとは御挨拶』
（！？）
思った事を、鳥は読み取った。
更に鳥は喋る。嘴を動かさず。
事態に追い付けなくなった彼は、そのままただ鳥の声を聞く。
『我が主、我を忘れたか？今我の力が、主には必要な筈』
（忘れた？忘れたも何も…我の力？）
『我が主、まるで判っていないと見える。昔はあの方と共によく遊んだのに』
彼は実体の無い首を傾げる。
（あの方？全く覚えがない…）
『主、忘れたのか、あの方を？』

頷いた途端、視界が急速に闇から目覚めの光へ変わる。
それでも尚、鳥は語っていた。
『あの方とは主の祖母、みき様の事だぞ…？』
（ばあ、ちゃん？）
そして賢樹は意識を取り戻す。
「…、い〝っっ…」
「鳥居君！？」
先程の傷の痛みに思わず声を上げる。
赤い衣に身を包んだ初が、すぐに賢樹の元へ飛んだ。
「大丈夫、鳥居君？」
「一応。まだ色々痛いけど、どうにかなりそうだ」
「良かった。…あの、鳥居君。言いにくいんだけど…」
賢樹の体を起こしながら彼女は目を背けて言う。
「真姫ちゃん、自分から『止まり木』役を買ったみたい」
「嘘だろ…まあ、その理由を聞く為にも、みちるをどうにかしなきゃな」

「ええ」

ふらつきながらも地に足を着けた賢樹は、片腕を広げる。
それに手を付け、彼と一緒に初は天を見据える。

「力、大丈夫か？」

「ええ。普段より供給は少ないけれど、十分」

「よし。…行って来い」

「言われなくても！」

力強い笑みを一つ残し、少女は翔んだ。

「真姫さんに見せつけたの？あなた達の仲の良さ」

「馬鹿な事言わないで。義務的な連絡しかしてないわ」

「そう。どうでも良いわ！『砕氷風舞（さいひょうふうぶ）！』」

投げ付けた吹雪が、秋空を駆ける。

『其は春の息吹、其は夏の吐息、包め我が身を、吹き進め此の空を
…吹燠・暖手（すいおう・だんしゅ）』

初の翳した左手から、熱風が吹き荒れる。

「ちっ…、『極大氷晶！！』」

文字通り、巨大な雪の結晶を作り、みちるは風から逃れた。
身を翻し、彼女は真姫に話しかける。

「真姫さん、まだまだいけそうかしら？」

「…仮にダメでも、私この手で初ちゃんを…いや、主南　初を倒してやる」

「心強いわ、真姫さん。もっと力をちょうだい」

言った瞬間、みちるの体を力が駆け巡る。
背筋がぞっとする程の愉悦、そんな感覚をみちるは得た。

「…っ！すご…素晴らしいわ！」

飛び立った彼女は、音さえも超えそうな勢いで。

「遅いわ！何もかも！！」

「…！！」

初が知覚したのは、彼女の振り上げた足が頬に当たった時。
赤い鳥の口に血が溢れた。

『炎球・狂咲！』

『極大氷晶！！』

『哥』の力も比較にならない。
初の放った炎は、みちるの氷の盾を溶かしも出来ず。

『円旋雪花！！』

青い鳥はそれを初に投げて寄越した。
力の増したみちるの攻撃をまともに受ける。
腹に当たったそれと共に、初は地に墜ちた。

「あっははは！！すごい、すごいわこの力！！」

「…ぐ、…う…」

「主南！」

賢樹は駆け寄り、冷たい重りをどかそうとする。

「うわ！熱(あつ)…」

「それほど冷たいのよ。…大丈夫、自分でどうにか出来るから」

「それまで黙って見てろってのかよ！！手がダメになったって、絶対どかしてやるからな…！」

「「……」」

救助の為に必死になる彼を、初と真姫は見つめる。
赤い少女は喜びを。
黒い少女は妬みを。
その瞳に映した。

「あと少しで願いが叶うわ、真姫さん」

そこに、みちるが帰って来た。

「あと少し。最高の攻撃で終わらせてやるわ。さあ、力を…」

そうして触れた、真姫の腕。
みちるはその時、聞こえなかった。
真姫は初達を見て、ずっと呟いていた。
「嫌だ、サッキーは私のもの」、と。
そうして生まれた力が、みちるの内に雪崩込む。

「えっ、何これ…い、いや、いやあああ！！！」

「「！？」」

傷付いた二人は見た。
恐怖に慄く、青い鳥の姿を。
涙でぐしゃぐしゃになったその顔は、真姫を見る。

「やめて…やめて真姫さん！！」

「……サッキーは、私のもの…」

「嫌ああああ！！！！やめてええ！！！！」

呟くと同時、冥い感情がみちるの中で荒れ狂う。
苦しむ彼女を見て、初は早口で語る。

「本当の『止まり木』じゃないからだわ。本当の『止まり木』は、純粋な力を『禽』に送るの。けどみちる達の力は感情を『禽』が力

に変換する…」

「という事は危険なんだな、みちるは。力、使えるか？」

「…少ないけど、やってみる」

初は素早く、長く哥う。

『太古初めに啼いた鳥、歌わず叫んだ生まれたと。次に嘆くは旋律ではなく自らの欲、肉をくれ。歌を口に乗せたは何時だろう、喜び天に叫ぶは何時だろう。満ち足る者しか其は分からない、故に此れは叫び、我(われ)が内から求める願い…灼叫(しゃっきょう)・祖声(そせい)！』

赤い鳥は哥うと、息を大きく吸った。
そして真っ赤な炎を吐き出す。
元は盾である氷は、初の炎を受けてもびくともしない。
しかし、初は諦めなかった。
初めは細く、息だけで吹いていた。
息継ぎ毎に、その口を開けていく。
やがて。

「…ぁぁぁぁぁぁ！！！！」

息は本当に、叫びに変わった。
長く当てた火か、それとも。
叫びと共に出た炎が、遂に氷を砕いた。
炎は突き抜け、空高く昇る。
ある地点まで来た時、炎はまた何かを貫いた。

「！！」

初は驚き、急ぎ『哥』を止めた。

「まずい…みちるの『六花衛膜（りっかえいまく）』壊しちゃった」

「…つまり？」

「私の炎を見た人がいるかもしれない。どうしよう、今はこの姿を維持するだけしか…」

身を起こし、賢樹は肩に手を置かせた。

その時。

「……何だこれ。…おい、賢樹？」

屋上の扉は、ずっと開いていた。

『六花衛膜』のお陰で誰も近付かなかったそこに、今、人が一人。

「…隼、何でここに…」

「いや、だって今一時だから交代に…それにしても…何だよこの有様…」

賢樹の親友はそう言い、屋上の奥の少女を見る。

冥い表情の真姫を。

「…賢樹。何でここに坂口がいるんだ」

「…隼？」

「答えろ賢樹！！坂口に、真姫に何があった！！」

それを見て、笑うのは、みちる。
腕に触れていた手を剥がすように強引に離し、ふらつきながら飛んだ。
隼の方へ。

「あっ…！」

初が声をあげるが、遅かった。

「やっぱり…嫉妬より、怒りよね。もう、あんな感情はごめんよ…」

「…何だ、お前」

「何もかもを、知ってる者よ。何があったか、全部あたしが教えてあげる」

『寒霧誘夢（かんむゆうむ）』。
呟き、みちるは笑ったのだった。

八．囚われる者達　～ｉｎｔｅｒｌａｃｅｄ　ｌｏｖｅ～（後書き）

実に半年ぶりの投稿です。お待たせいたしました。
この話で大体、内容的には三分の一あたりです。
まだまだ続く「四枚の羽根」、お楽しみいただくと幸いです。

九．二つの終わりと二つの始まり　～long, long time～

「…行けるか？主南」

「ええ。やっぱり『止まり木』は違うわね」

「…賢樹が、真姫をあんな顔に？」

「ええ、そうよ。悪い人よね、賢樹くんは」

真紅の『禽』とその『止まり木』。
直青（ひたあお）の『禽』と仮の『止まり木』。
そして、四人を見る黒い少女。

「……」

不可思議な戦いをぼんやり見つめながら、少女は過去を振り返る。
思い出すのはいるも、大好きな人の後ろ姿。

○　●　○　●

「おい鳥居！部活行こうぜ！」

「おう！今行く！」

始まりは四年前。
当時の坂口真姫は、今とは違いとても地味な少女だった。
制服を校則通りに着用し、髪は三つ編み、その目は眼鏡越しに物を見ていた。

得手不得手もあまりなく、ただただ日々を真面目に生きていた。
その中、彼女には賢樹が眩しく見えていた。
常に側には人がいて、誰とも物怖じせず付き合い、日々を自由に生きる。
そうなりたい、といつしか願うようになった彼女は、努力を始めた。
少しでも可愛くなりたい、少しでも気にかけてもらいたいと、陰ながら。
二年かけて、彼女はようやく賢樹と言葉を交わした。それがきっかけで、真姫は友達として彼に近付けるようになった。
ちょっとずつ、彼女は彼に近付いた。後少し、それが中々踏み出せないまま。

（…けど）

冥い瞳は、赤い鳥を見つめた。
突如現れた少女、主南　初。
ついこの間出会ったばかりなのに、あっという間に距離を詰め。
こうして戦う中でも、二人の目には互いに対する信頼がありありと見てとれる。

（…それだけじゃないかも、ね）

独り心で呟きながら、傍観する。

（…あーあ。何だ、私最初から…）

○　●　○　●

『夜空白花（やくうはっか）！！』

『翼の一振り、嘴(くち)の一刺し、御足の一突き、尾の一払い、全てを顕わすものを此処に…煉剣・朱片！』

星型の氷を、赤銅色の刀が弾く。

「真姫に何を言った、賢樹！！」

「何も言ってねえよ！」

飛ぶ拳を、首を捻って避ける。

空で陸で、四人は戦う。

「『水月刺刀』…、ねえ主南　初、あなた、はっきり言って本当の本当に邪魔者よ」

「そうね、自覚してるわ。けど過ぎた事は悔やんでも仕方ないもの。だったら今を頑張るだけよ」

互いの獲物がぶつかる。

鎚で打った鉄のような。厚い氷をつついたような音が響く。

「俺はずっと！！お前等の為に、真姫の為に！！」

「どういう事だよ！？意味分かんねえよ！」

ぐい、と隼は賢樹の胸倉を掴む。

怒りと戸惑いが、双方の瞳に映る。

「迷惑なんかかけたくない、でも」

「抑えられるならそうしたいよ、でもな」

揃う言葉は空に響く。

「「どうしようもない！！」」

動く。

初はみちるのサーベルを弾き、隼は賢樹の服を離す。

よろける二人に、一撃。

空から数滴、血の雨がコンクリートに落ちた。

「…っく、『直治清水』」

「派手にやられたな」

切られた腹に手を当てながら、みちるは隼の肩に手を置く。

「大丈夫、鳥居君？」

「平気。普段より本気なだけだ。結構力入ったボディブローだよ」

地に座る賢樹を、初は手を取り立たせる。

そして四人はまた向かい合った。

「あたしの『止まり木』、今日はなんだか、これで決着が付きそうよ」

「そうだな。いくらでも力、使えよな」

「ごめんなさい、いつも」

「気にすんなよ、主南。お前はただ、全力でやれば良い」
二人の鳥は、それぞれの翼を広げた。
「…あなたが『止まり木』なら、本当に良かったかもね」
「…ありがとう、私の『止まり木』」
そして、綺麗な声で『哥』を紡ぐ。
『我が内に満ちる哥、力、思い。形になどならぬ、形になどしてはならぬ。今溢る、熱持つ奔流』
『…舞踊霜子』
『…炎波・湯滝』
バサリ、と一撃ち。
羽撃きと共に疾る力。
吹雪と、炎の川。
静かに、それは拮抗し。
やがて。
○●○●
「……」
眠る、隼。
それが決着を意味する。

「本当に死んでないよな？」

「当然よ。自分の、仮でも『止まり木』を殺す訳ないでしょ。眠ってるだけ」

「大丈夫よ鳥居君。私の『湯滝』は誰も焼いてないわ」

三人は隼を見ながら話す。

時刻は午後一時半。本来の日常を忘れ、屋上に五人の影。

その五人目は急に動き出した。

「…坂口」

「…サッキー。後夜祭の時、昇降口に来て」

「あ…ああ…」

言うと、真姫は一足先に屋上を後にした。

「あいつ…」

「記憶消せないわね、これじゃ。まあいいわ。みちる、今日こそ…」

振り向いた時には、既にみちるの姿は無かった。

（逃げられた…早くに対処すべきだった）

むくれる初は変化を解き、隼の脇を抱える。

「…鳥居君、とりあえず彼をどこかに移しましょう」

「そうするか。…にしても何でこいつ、あんなに怒ったかなあ」

（…鈍感過ぎ）

○●○●

数時間後。

日は暮れ、虫が鳴き始める。

後夜祭楽しみだね、などといった喧騒から一人離れ、賢樹は昇降口へ向かった。

既に、そこには彼を呼んだ人がいた。

半袖のワイシャツにサマーセーター、蒼雲高校の夏服を着た、それは賢樹の友人であった筈の少女。

「…待たせた、坂口」

「大丈夫だよ。…ありがと、来てくれて」

表の暗い景色を見ていた坂口　真姫は、彼の声に振り向いた。

笑う彼女の頭には尚、賢樹があげた黒いリボンが揺れていた。

「…それで、話って何だ？」

「サッキー、とぼけないで。分かってるんでしょ？」

「いや、全く分かんないんだけど」

そっかあ、と言うと真姫は真っ直ぐに賢樹の目を見た。

少し、悲しそうにその言葉を放つ。

「鳥居　賢樹君。…私はあなたが好きです」

「……」

「中学の頃から、ずっと見てました。…付き合って、くれませんか？」

賢樹も、真姫を正面から見ていた。

本当は予期していた言葉を受け止め、ややの間の後、口を開いた。

「ごめん」

「……」

「坂口は…俺にとって大事な友達だから。……だから」

真姫の頭が、段々と下を向く。

「…分かってたよ」

小さくそう呟くと、彼女は顔を上げる。

真姫は、笑顔だった。

「えへへ、良かった。私、サッキーにとって大事な友達なんだね！ちょっと嬉しいかも」

「ああ…」

「それじゃ、私はこれで。後夜祭、見る気はないんだ」
言うと身を翻し、足元に置いてあった鞄を持つ。
靴を下駄箱から取り出し、履き始める。
その小さな背中に、賢樹は一言。
「…ごめん、坂口。本当に…」
背中は一度小さく震えた。
首が縦に大きく振られた。
「じゃあな…」
そっと、その背に手を置き、賢樹は昇降口を後にする。
その彼の背に、声が飛ばされた。
「サッキー！！」
振り返ると、靴を脱いだ少女がそこにいた。
涙でぐしゃぐしゃの笑顔で、手を振って。
「また…明後日！！」
「おう！気を付けろよ！」
「うん！！」
真姫は、さよならを告げた。
○　●　○　●

「……」

ローファーを履き直して、昇降口を出る。
歩く少女を狙う影。
背中からの衝撃に、真姫は声をあげた。

「きゃああっ！？」

「何しょぼくれてんだ？」

振り返った真姫は、目を丸くして驚く。

「しゅ、隼！？」

「誰だと思ってたんだよ？」

「…お昼の、青い人…」

ああ、と隼は頷く。

「そっか、わりい。てか今日は何だったんだ？」

「そうだねえ。何か、ファンタジーの世界にいたね！…サッキーも、初ちゃんも」

静けさが場に降りた。
内緒話をするように、真姫は声を潜める。

「私ね、隼達が戦ってる時、色々考えたの。昔の事とか。…それで

気付いたの。私は初めから…賢樹君の眼中に無かったんだって」

真姫は空を見上げた。

遠くに橙、近くに藍の色が広がる空には、薄い半月が光っていた。

「頑張ったんだよ、これでも。服装とかすごく変えて、明るい子になろうって、そういう子の真似して。…けど」

真姫の視界の中で、月が歪んだ。

俯いた涙声は、悲しみに沈んだ。

「…だめだった…」

真姫の体から力が抜ける。

学校の前庭、人はまばら。その目も気にせず真姫はその場にしゃがんで声をあげて泣き始める。

彼女を見下ろしながら隼は呟いた。

「…駄目な訳あるかよ」

「……？」

「最初は全く近付けてなかっただろ。ずっと遠くからあいつを見てるだけだっただろ。…こんなにも近付いただろうが。主南さんとは特殊な間柄だからそれを除けば、あいつに一番近いのは、お前だよ」

その物言いに、真姫は問う。

「…隼。何で私がサッキーの事見てたって、分かるの…？」

「…見てたからだよ」
隣にしゃがんだ隼は、真姫にはっきりと告げる。
「俺がお前の事を、ずっと見てたからに決まってんだろ」
二人の事を見るのは、星と月だけ。
○　●　○　●
それから二日後。
「おはようサッキー！片付け大変だねえ」
「おう、おはよう。本当だよな、ずっと文化祭でいいよもう」
いつも通りの朝、いつも通りの日常。
変わらず笑う真姫を見て、賢樹は複雑な気持ちでいた。
それをどこかに吹き飛ばす、聞きなれた低い声。
「おはよう、賢樹、坂口！」
「おう、今日は早いな隼」
「まあな」
そこで、賢樹は違和に気付いた。
真姫がすぐに言葉を返さなかったのだ。
「…おはよ、隼」

「…おう」

（…！？何だこの空気…）

普段ならここで真姫が憎まれ口を叩き。
いつもなら隼がそれに皮肉を返す。
それらが一切、無かった。

（…何なんだ、この二日間に一体何があったんだよ！？）

いつも通りでない、いつも。
賢樹はそれに戸惑うばかりであった。

○　●　○　●

「…そう。どっちも大丈夫そうなのね。なら良かった」

「一応な。けど何だかあの二人妙にギクシャクしてて。すっげー気になる」

（…大方予想はつくわね）

その日の放課後、主南神社。
その境内で初と賢樹は言葉を交わす。
二人の手には箒が一本ずつ。
掃除をしながらのお喋りであった。
制服姿の初は作業をしながら口も動かす。

「それにしてもあなたの夢、気になるわね。実はあなたが『瑤（たま）』を

持ってたりしてね」

「そんな訳あるか。だったら俺も三年前に『禽』になったりしてんだろ」

「…そうよね。何なのかしらね、一体」

会話を進めながら、箒で落葉を一つの箇所に集めていく。

一瞬、そこで箒が止まった。

賢樹が持つ方の箒だ。

「そういえば、あの時の言葉、どういう意味なんだ？」

「…何が？」

「友達じゃなくて…ってや」

そこで言葉は途切れた。

足元に蒼い羽根が、落ちて来たから。

「逃げて、鳥居君！！」

身を翻した瞬間、それは爆発した。

背中に熱と苦痛が駆けた。

「…ぐっ、がぁっ…！」

「鳥居君…！それにしてもこの力…強過ぎる。あいつに何が…」

『珠』の力を使い、初は哥ってすぐに賢樹の背を癒す。

「みちる、出て来なさい！！」

「嫌だわ初ちゃん。あたしはさっきからずっと、ここにいたんだけど？」

声のする方角は、初の正面。

「阿」の口の狛犬から。

それが唐突に歪み、狛犬の前にみちるが現れた。

彼女の足は、地に着いていなかった。

「…みちる、まさか」

「ええ、ようやく見付けたの。あたしの『止まり木』」

蒼い鳥は肘辺りまで袖を捲る腕に座っていた。

黒と黄のネクタイ、黒いスラックス。

烏の濡れ羽色をした長い髪を一つに束ねる男は、声を発した。

「初めまして、紅い鳥とその『止まり木』。俺は要片（やすかた）　玄。…よろしく」

笑んだ男の目は、酷く生き生きとしていた。

獲物を見付けた獣みたい、初はそう思った。

九．二つの終わりと二つの始まり　～ｌｏｎｇ，　ｌｏｎｇ　ｔｉｍｅ～（後書

半年以上更新せず、申し訳ないです…

ここからが本番といったところです。

これからもお付き合いの程よろしくお願いいたします。

十．差　～and，impact～

「今の『哥』、もう一回やってみてよ、みちる」

「ええ。…『爆羽青海（ばくはせいがい）』」

主南神社の境内。
少女によって、真っ青な鳥の羽が撒かれた。
その数枚ははらはらと宙を舞い、地に落ち、
爆ぜる。

「…っ！」

「あっははは！綺麗な炎ね、要片くん！」

「全くだ、美しいよ」

青い炎に囲まれた初は、痛みで意識が朦朧としている賢樹を引き摺りながら上へと飛んだ。

「…わりぃ…主南…」

「喋らないで。今回はまずいわ、退却しましょう」

唇を噛んで悔しそうな賢樹を見、眉を寄せる初。
そこに容赦なく少女は襲いかかる。

「逃げようたって、そうはいかないのよ！！」

「！！」

哥う暇がなかった初は、何の防御も取れない。
深く、氷の剣が翼を傷付けた。
紅(あか)が、飛び散る。

「うああ゛っ！！」

「今度はこっちよ！『氷縄永牢！！』」

氷で出来た鎖がもう片方の翼を縛り付ける。
動きを抑えられた羽は、その役目を果たせず、

「…っ！！」

初はその背から地に墜ちる。
地面からそう離れていなかったので大事には至らなかったが、強く背を打ったので、その痛みは確かに彼女を苦しめた。

「…っ、くっ…」

肺から全ての空気が無くなる。
酸素を求める初は、霞む目で腕に抱いていた賢樹を見た。
彼もまた、ふらつきながら立ち上がろうとしていた。
それに勇気付けられるが、

「『星氷欠片』。…終わりね、あなた」

五つの氷柱が二人の服を縫う。
身動きが取れない。

「圧倒的だなあ。俺がいなくても大丈夫だったんじゃない？」
「力をセーブしながらだったから、全力で出来なかったのよ。あなたが現れてくれて助かったわ、本当に」
地に足を着けたみちるは、玄と共に初達に歩み寄る。
「さあ、ちょうだい、あなたの持つ『珠』を…」
「…い、やっ…」
抗えない初は、その手が『珠』に伸びるのを見る事しか出来ない。
目を瞑り、終わりを覚悟した瞬間、
「『翼の護り』（プロテクト・ウイング）…我の社で何をしておる」
光の翼が初を包んだ。
『珠』に触れようとしたみちるの手はそれをバチリと弾かれる。
「…あなた…」
「我は鳥の巫女、本来干渉はせぬが社で暴れられるのは御法度というものでな。争うのは他所でやってくれ」
境内と石段を繋ぐ鳥居。
歩いて来たのは紺のセーラー服に身を包む少女。
柔らかそうなクリーム色の髪に、黄の瞳。
初の妹、主南　紫穂であった。
今は巫女としての人格「黄穂」であるが。

「巫女の『瑞』は最後に手に入れなきゃいけない…それに巫女の言う事は絶対…仕方ない。帰るわよ、要片くん」

「ふーん、あの子もなんだ…命拾いしたね」

『仮小羽矮』、そう言い玄に羽を授けると、みちる達は共に何処かへ飛び去った。

地に縫い止められたままの二人は、去った二人を悔しげに見つめていた。

○●○●

「負け戦、だったようじゃの」

「完敗だったわ…」

主南神社内、主南家。

居間で賢樹と姉妹は先の戦いを振り返る。

主に悔やむ形で。

「我があの時いなければ、戦う力は初の手には無かった。間一髪じゃったな」

「…そうね。…みちるがあんなに強いやつだなんて思わなかった」

『星氷欠片』を壊せなかった、初はそう続けた。

沈黙が降る。

小さく破る声は、怒りを孕んでいた。

「…俺のせいだ。俺が…何も出来なかったから」

「違うわ。私があの二人を、みちるを甘く見てた。それに奇襲に気付けなかったからよ」

「違う！あの時俺が気を付けてたらこんな事には…！」

賢樹の声が段々大きくなっていく。
まずいと黄穂は思うが、それより早く言葉を返す、姉。

「不意をつかれなくてもあの力の強さではどうしようもなかったわ。あなたのせいじゃない」

「どうにかなった！絶対、奴等に負けはしなかった！」

「言ってなさい、どちらにしろ私達は負けていた。あの力の差は埋めようが「埋められた！！」

入り込んでいた炬燵から立ち上がる。
出された緑茶が危なっかしく揺れた
互いは互いを、睨み据える。

「…帰る」

数秒の後、賢樹はそう告げ目を離した。

「『止まり木』…」

「……」

無言のまま、荒々しく扉を閉め、賢樹は家を去った。

「…どうするのだ、初」

「知らないわ、あんな奴」

着替えてくる、初はそう言い居間を離れた。

○　●　○　●

（負けたのなんて分かってんだよ）

朝。露に濡れる銀杏の葉をぐしゃりと踏んでいく。

（俺がもっと、しっかりしていれば…）

それを振り返り、見る事などない。

（…あいつは強いんだから）

すれ違ったセーラー服の少女に顔をしかめる。

（…悪いのは、俺なんだ、だから…）

走るブレザーの少女とぶつかりそうになり、気分をますます悪くする。

「すいません！」

「あ、はぁ…」

謝った少女の後を走る少年が、周りを見ろよサラ、と彼女を怒っていた。
重い足で学校へ向かう。
「おはようサッキー…どしたの？」
「坂口、構うな。…何だか知らんが、今は関わらない方が良い。泣かされるぞ」
「う、うん…」
学校でもずっと、賢樹は黙り込んで昨日の戦いを考えていた。
それは自責。
そして、一つの光となる。
（…強くなろう、俺も）
一人、彼は強さを考え始めた。
光の名は、道標。
○　●　○　●
（…悪いのは、私）
筆で走らせる、血のような赤。
（弱いのは、私…）
その上に走る漆黒。

（私がもっと、しっかりしてれば…）

強く押し付けられた筆が、

（…負けなかった。彼を、守れた…）

掠れた線を描く。

「…主南さん、どうしたのそれ」

「え？……ああ…」

思考に入り込んでいた初は、自分が描いた絵を見て嘆息した。

混ざりきった赤と黒の不協和音が、初の心情を写し取る。

「大丈夫？ここ最近…」

「…はい。大丈夫です」

「無理はしないでね」

首肯のみで返事をする。初はこの失敗作をどうしようかと薄く考えながら、また先の事を思う。

（黄穂が言った事が本当なら…無理でもなんでもしなきゃいけない）

揺れる瞳が、絵の赤を映す。

（…強く、なる為には…）

一人、彼女は強さの為に決めた。

○　●　○　●

そうして、全く会わない二週間が過ぎ。
授業終わりの放課後、それは起こった。
賢樹は陸上部である。
その日も練習が終わった後、他の部員と共に着替えていた。
だがこの二週間、彼は練習に身が入っていなかった。
汗の臭いで満ちる部室の窓は開いていた。
走り回って暑さを感じていた部員達は皆それを恵みと感じるが。
賢樹だけは寒さを覚えていた。

（…分かってんだけどなあ、やらなきゃいけないのは…）

薄く腕に鳥肌を作りながら、彼は体操着を脱ぐ。
そこで声がかかる。

「あれ、まだ着替えてたか、鳥居？」

「え、あ…はい」

周りを見渡せば、先程までいた仲間はいない。
気付かない内に思考に入り込み過ぎていたらしい。鳥肌も当然かもしれない。
三年生、つい最近まで共に走っていた部活の先輩。
刈り込んだ頭の彼は賢樹に近付くと、その頭に鍵を置く。

「もう他の奴帰ってんぞ？早くしろよな」

「はい。すいません…」

元気ねえぞ、と笑いながら彼はさっさと部室を後にする。
賢樹だけが小さな部室に残される。
溜め息を一つ落とし、着替えを終わらせる。
乗せられた鍵は適当にズボンのポケットに、ネクタイはするのさえが煩わしく、肩にかけるだけに留めた。

「…さて」

変えるか、独り呟いた時だった。
強い風が中に吹き込む。
音を立てて埃を舞い上げるそれは、窓の存在を彼に教える。

「あ、窓…」

振り返る彼が見たもの。
それは窓枠にしゃがむ、主南　初。
緋の衣を纏い、紅い羽根を散らして。
出逢いの日のように、二人は顔を合わせた。

「に…主南？」

名を呼ばれた彼女の動きは、正に風そのものだった。
部屋に入り込むと、窓を閉め扉の鍵までかけた。
完全な密室を作ったその中で紅い風は、
賢樹を突き飛ばす。

「！？」

何も言わない少女は、倒れた彼の頭を手に持ち。

「……！！」

果実を口に含むように、唇を合わせた。
ずり落ちた部室の鍵が、高い音を立てて落ちる。
その音が消えた時、ようやく賢樹は口に自由を得た。

「にし…っ」

な、と続く口はしかしまたも塞がれる。
啄むように、何度も、何度も。
一瞬離れた時、ようやく賢樹はその隙を突いて初を引き剥がす。

「なんだよ！どうしたんだよ！」

「やめて、止めないで！」

「おかしいぞお前。急に何が…」

その時見た初の顔。
赤く色付いた頬と唇、そこに伝う涙。

「…主南」

「黄穂が、言ってたじゃない。戦力は私しかいなくて、…こういう事すれば、強くなれるって…」

「ある訳ねえだろ。そんなんで強くなれたら苦労しない」

「だったら！！もうどうすれば良いのよ！！」
吐き捨てるように初はそう叫ぶ。
初めて見せた彼女の激情に、賢樹はただ驚くしかない。
「…ねえ、だったら、どうすれば良いの……教えてよ、鳥居君…」
「……」
「…強くなりたくない…負けたくないの。紫穂を…取り戻したいの…！」
初は泣き顔を手で覆い隠す。
言葉はしゃくりあげる音に変わった。
背を丸め、俯く彼女に、常に見せる強さはない。
賢樹は何も言わず、行動を起こした。
腕を伸ばし、少女の肩を優しく握る。
「大丈夫だよ。今までも何とかしてきただろう？俺に会う前も」
肯定が首の動きで示される。
それを見て、彼は小さく笑って励ました。
翼の折れた、紅い鳥を。
「だから…たった一人で頑張ってきたから…もう、羽を休めたって良いよ。『止まり木』は、ここにいる」
初がついに崩れた。

「鳥居君…私、私…！」

「…何も言うな」

「わた、し…う、うわあああ！！！！」

初は、賢樹にもたれて泣いた。
子供のように大声をあげて、体裁など気にせず。
変身の解けた彼女の、薄い色素の髪を撫でながら、彼は思う。

（…ずっと、我慢してきたんだな）

その事に気付けなかった自責が襲うが、目を閉じる。

（…けど、今は…）

思考を止め、少女の嗚咽をただ聞く。
部室に程近い校庭の証明が、二人を淡く照らす。
狭く小さな部屋の中、二人はしばらくそうしていた。

十．差　～and，impact～（後書き）

という訳でやっと十話でございます。
サブタイトルの訳は「そして、衝撃」といったところでしょうか。
まんまですね。
今更ですが、サブタイトルは毎回日本語～英語～となっている事は知っていましたか？
深読みすれば英語だけでネタバレができます。よろしければ深読み、いかがでしょうか（笑）

閲覧、ありがとうございました。

十一・今更の自覚　～Ｐｏｓｓｉｂｌｙ…～

「ワイシャツ、びしょびしょね。乾かさなきゃ」

「大丈夫だし、そんな事で力使うなよ。家に帰れなくなるぞ？」

「その時は送ってもらうわ」

「おい…」

蒼雲高校、陸上部の部室。
閉め切られた空間の中で、二人はようやく立ち上がる。
最終下校時刻など、とっくに過ぎていた。

「…真っ暗ね。大丈夫かしら」

「あ、『禽』の時は夜目あまり利かないんだっけ。平気なのか？」

「多分。空高くを飛ぶから、何かにぶつかる事は無いわね」

目元を真っ赤にした初は、『珠』の力を使って翼を広げる。
夜でもその身に纏った緋色の衣は、鮮やかに目に入り込む。

「…やっぱり、変わらないわね」

「力か？そうだな。目に見える変化はないな。…嘘かよ？」

「さあ」

（…けど、力の質が少し変わったかしら。今までより、そう…少しだけ長く使えそう）

自分の手を少し見つめた後、窓の鍵を開けてその枠に足を掛ける。

「それじゃ、私は行くわ。…今日は…あれだけの為に来たから」

「…気を、付けろよ」

「…うん」

急に気まずくなった二人は、そうして別れる。
すぐに赤い影は小さくなり、闇に消える。

「…って、俺」

（…あれ、初めてだったんだけど）

複雑な気持ちを抱えながら、賢樹は手の甲で口を押さえた。
落ちていた部室の鍵が、表の光で鈍く輝く。

○　●　○　●

一週間後。

「じゃあな、隼、坂口！」

「おう、またな！」

「バイバーイ！」

放課後、賢樹は早足で学校を出る。
数秒の後、昇降口を離れていく彼を見ながら、教室にて親友達は喋る。

「今までの二週間、何だったんだろうな？」

「うん。すっごい考え事してたよね。まあ元気になって良かったね！」

「そうだな。じゃあ」

窓辺から廊下近くの自分の席に戻った隼は、鞄を持ち上げ一言。

「俺達も帰ろうぜ…真姫」

「…うんっ」

手を繋ぎ、二人は教室を出る。
そんな事など全く知らない賢樹は、その足で主南神社へ向かう。
石段を上り、見えてくる朱色の鳥居。
それをくぐると見慣れた境内。
堂へと伸びる参道の途中で、私服の初が黄穂と共に掃除を行っていた。
真っ赤なパーカーに白い薄手のタートルニット、スキニージーンズを履く普段着の彼女。
駆ける足音ですぐに彼女は石段の方へ目を遣る。

「…鳥居君」

「…よう」

どこかよそよそしい挨拶を一つ。
巫女服を着る黄穂は、掃除の場所を変えるように静かに場を離れた。
箒で落葉を集める音さえ聞こえない、静かな夕方。
会話を始めたのは初だった。

「どうしたの？何か用があるから来たんでしょう？」

「まあ。…その、この前はごめんな。…負けて悔しくて…当たっちまった」

「私だって同じだったから、良いわ。それよりも」

言うと、箒を地面に置いて初は頭を下げた。

「…ごめんなさい。…あんな事して」

「強くなりたくて仕方なく、だろ？お前の方が嫌だった筈だ」

「それでも…」

「だから良いって。そんなに気に病むなよ」

顔を上げる初だが、納得いかないといった表情で、箒を両手で拾う。

（全く責任感の強い奴だな…まあ、主南らしいかな）

そう、思った時。

「大体三週間ぶりだね、お二人さん」

「「！？」」

突然の来訪者。

鳥居の上の中央に彼はいた。

要片　玄。彼は笑って告げた。

「戦いに来たよ。けどここは駄目らしいから呼びにだけ僕が。涙跡（なみあと）川の上空で待ってるって」

涙跡川は、二人の住む市、星灯市を流れる川の名前だ。

「わざわざ有難う御座います」

「固いよ喋り。もっとフランクにいこうよ初ちゃん。…じゃ、また後で」

言うだけ言うと、玄はみちるの『哥』で作られた水色の羽で空を飛んで行った。

「…馴れ馴れしい奴」

「じゃあ勝って、正してやろうぜ？」

「良い考えね」

小さく笑うと、初は『禽』の姿に変わる。

「飛ばすわよ。掴まりなさい！」

「おう！」

飛び立てば、風が起きた。
赤い羽根が、紅葉と共に踊る。

○　●　○　●

「お久しぶり、初ちゃん」

「久しぶり、みちる。あなたの『止まり木』、馴れ馴れし過ぎるわ。少しその態度を直させてくれないかしら」

「あなたが勝ったらね。けど…あなたはあたしに勝てない」

星灯市、涙跡川上空。
そこに翼を持った者が三人。
初、みちる、玄である。
同じ場に紅い円座（わろうだ）に座る者が一人。
賢樹である。
時節は晩秋、冷たい風が吹く空のただ中で、彼等は今日も力を巡る戦いを始める。

「勝てる。今回は不意打ちじゃないもの。御親切にどうもありがとう」

「分かってないわね。今のあなたとあたしの間には、埋められない差ってものがあるの。ハンデをあげたって事、理解してちょうだい！」

蒼い鳥が『哥』を口に乗せた。
紅い鳥もそれに続く。

『飛羽乱撃！！』

『鳳（おおとり）の通いし後、残るは金色の軌跡。我が前に集え、其は全ての牙を砕く盾…防護・金城！』

幾度となく初を襲う羽根が飛来する。
金の光を生み出した彼女はそれから身を守るが、

（…全力でいかないとやっぱりまずい…まだ油断してる、私）

固く閉じた口の奥で、歯が圧力に悲鳴を上げた。
不意に攻撃が止む。攻撃による煙で前が見えていないようだった。
その隙に初はそこから離れ、座る『止まり木』の元へ向かった。

「大丈夫か？」

「…きついわ。毎回全力で行かないと、また…」

「ならそうしろ。俺が気絶するぐらい、力持っていけ」

「…気絶するの？」

「しねえ。だから思う存分やれ」

いつも通りの会話をし、彼から離れる。
自信を取り戻した『禽』は、先程貰った力を全て使う。

『雅なり、此の背の翼の主。血片飛び交う戦場(いくさば)でさえ、花弁(はなびら)の散る舞台に変える…拳舞・花踊』

静かに哥うそれは身体強化の『哥』。
見た目に変化はないが、それは確かに初の肉体に活力を与える。

「…『夜空白花』…」

訝しげに眉を寄せつつ、星型の氷を多く、大きく生み出すみちる。
それの向かうスピードもまた速い。
初は動かない。
氷は全て初に当たり、白い煙となって砕け散る。

「意味無かったわね、何なのかと思ったけど。これであなたの『珠』はあたしの「五月蝿い」

ほくそ笑むみちるの、すぐ後ろ。
初は、いた。

「…え？いつの間に…」

「要片君、でしたっけ。…ついさっき、ここに」

神速の蹴撃。
脇腹を蹴られたみちるは、真横に吹っ飛ぶ。

「…っ、やって、くれるじゃない…！」

彼女の闘争心に火が付いた。
その身に制動をかけ、羽撃いては初との距離を詰める。

「あたしがそう簡単にやられと思って！？『氷拳炎破！！』」
『哥』の力でみちるの右手に氷が纏わり付く。
青く輝く手甲が、白い冷気を尾に引きながら初の体に吸い込まれる。
初はそれを回り込むように避け、その背に肘を一発。
「ぐっ…！」
（よし…）
その思いこそが、油断だった。
「…『巨氷砕指』」
ぼそりと呟くそれは、みちるの身体強化の『哥』。
反撃の狼煙は小さく紡がれ、紅い鳥はそれに気付けなかった。
次の瞬間、初はみちるを見失う。
「！？…！！」
その目に彼女を映した時には全てが遅く。
氷に覆われた華奢な腕が、初の腹に深く刺さっていた。
「…言ったでしょ、なめないでって」
静かにそう言うと、腕を引き、振る。
氷が割れると同時、新たに哥った。
『水月刺刀』、と。
胃から内容物を吐き出し、苦しそうに喘ぐ初は強くみちるを睨んだ。

「……みち、る」

「何、今更命乞い？だったら『珠』を渡した方が早いわよ」

『氷拳炎破』で生まれた氷を使って作られたサーベルが、青ざめた『禽』の顔を映す。

「今ここで頂戴な。…あ、そんな事したら」

一歩分、詰め寄り。

「死んじゃうわね、あっはははは！！！」

ざっくり、と。横一閃。
その腹が、切られた。

「！！！！」

その苦痛に遂に耐え切れず、初の変身は解けてしまう。
少女は落ちる。
腹はやはり赫い。
夢でないと、色彩は賢樹に伝えた。

「主南！！！」

叫ぶと同時、円座が消失する。
賢樹も落ちるが、むしろ好都合と彼は考える。

「主南！！しっかりしろ！！！」

声を飛ばすが、返事はない。
まずい、胸中で彼はそう感じた。
「あーあ。殺しちゃって良いの、みちる？」
「良いのよ。あの巫女に何言われるか分かんないけど、『珠』が手に入ればどうだって」
「ふーん…」
玄は、眼下の二人を見、口元を歪める。
「ま、そうだね」
笑みの形に。
○●○●
「主南、起きろよおい！！」
先に落ちる少女は未だ意識が戻らない。
（俺にもあいつらみたいな力があれば…！）
歯噛みして自分の非力を呪う。
「くそっ…主南！！！」
少女はただ、大地へ向かう。

その時、無意識に賢樹は思った。

（嫌だ…）

その思考にはっとして、その訳を自らに問う。

（何で、「嫌」なんだ？）

そうして思い出されたのは、自身の考えを覆された戦い。

〈「見て、これが現実。…綺麗ね」〉

次に、一週間前の泣き顔。

〈「…ねえ、だったら、どうすれば良いの……」〉

次に、文化祭のお化け屋敷。

〈「ひっっ……！！」〉

次に、次に、次に。

走馬灯のように思い出される、主南　初。

（…俺、こんなに？）

その思いを、想いを、伝えるように。

海抜数百メートル地点。

鳥居　賢樹は、叫ぶ。

「目ぇ覚ませ、主南あああ！！！！」

「……っ」

目を、勢い良く開けた。
苦痛ばかりの現実に戻って来た初は、緋の衣で腹の血を隠す。
羽撃き、落下する賢樹を助けに飛んだ。

「鳥居君！！」

「主南！！！」

呼び合う二人の手は、確かに繋がれた。
互いの無事に、二人は笑い合う。
その時、聞こえないぐらい小さな声で、賢樹は呟く。
良かった、と。

「…？」

何か言ったか、問おうとした時見た彼は、本当に嬉しそうで。
無意識に、無自覚に、唐突に。
鼓動は確かに打った。

（…！）

押さえた胸の奥で、その後もそれは止まず。
戸惑いと憶測が、初を乱した。

（嘘でしょ、まさか…）

それでも消えない予感。

振り払うように、彼に呼びかけた。

「鳥居君、あなたの力、全部使うかもしれないけど大丈夫？」

「今更聞くなよ。…ぶちかませ」

「…ありがとう」

少ない力で、また円座を作って座らせる。

賢樹が伸ばした腕にもたれ、遥か遠くの敵を見遣る。

（『拳舞・華踊』で敵わなかった。もっと速く、もっと強くならなきゃ）

『舞い狂え、紅き禽よ。花弁より美しく散るは其の麗しき風切羽根…拳嵐（けんらん）・踊羽（ようう）』

唱え、新たに力を宿す。

続けて賢樹から力を吸い、また『哥』を紡ぐ。

『吹き荒れる風、自由なる其は何時迄も尽きぬ。永遠に燃ゆる焔を纏え』

だがそこで初は言葉を切った。

「…行ってくるわ」

「ああ」

少なく交わす言葉だけで、充分。

音さえ超えそうな勢いで、初は翔けた。
その間、数秒となく。
みちるの元へ躍り出た彼女は、拳を彼女に飛ばした。
「！！…生きてたのね。随分と速いじゃない」
それでも、みちるは紙一重で避けた。
「けどまだよ！」
「……」
回避に使った体の動きを攻撃に回す。
打ち出される蹴りをやはり危うく避ける初。
しばらく拳打の応酬が続く。
決定打は無く、掠り傷だけが二人に増えていく。
「…うざったいわ、『氷拳炎破！！』」
「……」
「さっきから何ブツブツ言ってんのよ！！」
凍った拳が初を貫こうとする。
逃げるように退き距離を取り、みちるに話しかけた。
「…教えてあげましょうか、何て言ったか」
「どうでも良いわ。『氷羽嵐「『彼の力を受け、其は今嵐にならん』
、って言ったの」

真っ直ぐに目線を、声を飛ばす。
全ての詠唱は終わり、引き金を声に。

『炎嵐・紅風(べにかぜ)』

翼で起こした風は、吐息から生まれた炎と共にみちるへと疾る。
風を起こせば起こす程、強まり、渦巻く炎。
そしてみちる達を取り囲む、炎の渦が出来上がる。

「うわ、どうすんだよこれ」

「『舞踊霜子！！』…ダメ、勢いが止まらない…！」

「マジかよ…」

やがて、炎は消えた。
そこにみちる達はいなかった。代わりに下方に小さな影が二つ、街の方に行くのを初は見た。

「主南ー！」

呼ぶ『止まり木』の元へ向かうと、小さな空間に立つ彼は手を振っていた。

「お疲れ。勝ったんだな」

「ええ、どうにか。…これからはきつい戦いになりそうね」

頷くと、賢樹はとりあえず、と始める。

「帰ろうぜ。お前、まだ腹治してないし」
「あ…忘れてたわ。…痛…」
「ほら、早く。それとも治してからにするか？」
「…ええ」
痛みを思い出し、急に顔色を変えた彼女はぐったりとする。
賢樹の肩にもたれると、苦しそうな息遣いと呻きが彼の耳に入った。
「…大丈夫かよ…」
「治療できるぐらい力が貯まれば…すぐだから……」
「そうか」
空は橙の色が広がりかけていた。
周りを見渡せば、その色に染まった雲だけが浮かぶ。
オレンジ色の中、偶然にも二人は同時に口を開けた。
「「もしかしたら」」
「…何だよ。先に言えよ」
「…鳥居君からで、良いわ」
その後に続く言葉は無かった。

（（…そんな、まさか））

好きになってしまったかもしれない、同じ事を思う二人に、それを問う勇気はまだ無い。

沈み行く夕陽が、二人には揺れて見えた。

十一・今更の自覚　～Ｐｏｓｓｉｂｌｙ…～（後書き）

ようやく互いが意識をし始めました。遅い（笑）
展開も段々早くなります。ご注意を。

閲覧、ありがとうございました。

十二・意識　～White jewel～

「は！？マジかよ！？」

「気付いてなかったんだな…」

「もう分かってると思ったんだけどね。サッキーらしいね」

ある日の放課後。
賢樹は親友二人からある事実を知らされた。

「まさか、え、嘘だろ、いつ付き合い始めたんだよ？」

「えへへ、えーと、十日前ぐらい？」

「お前が考え事とかしてて暗かった時だな」

隼と真姫は顔を見合わせる。
その表情はこちらが幸せになりそうな程明るい。

「ちょっと待て…なんか複雑だ。まず隼、お前坂口の事好きだったのか？」

「おう、入学式に一目惚れってやつだ。ついでに言うと俺が告った」

即答する隼に少し呆れた後、今度は真姫に向き直る。

「坂口、お前確か…」

「う、うん。今もサッキーの事、好きだよ。ほら」

言って、頭に手を持っていく。

そこには賢樹が真姫の誕生日に贈った黒いリボンが髪を縛る。

「隼はね、それでも私を好きでいるって…言ってくれたの。それに軽くノックアウトされちゃって。サッキーも好きだけど、隼の方が今はより好きって言うか」

「何だそりゃ…」

「乗り換えとかだなんて考えないでよ？ちゃんと悩んで、自問自答もいっぱいして、それで出した答えなんだからね？」

笑う真姫は、不意に顔からそれを消す。

「…おかしいよね。あんなにサッキーの事が好きだったのに。勝手とも思うよ。けどね」

一度言葉を切り、語る。

「理屈とかでどうこう出来るものじゃないからね。…どうしようもないの、誰にも」

「……」

その言葉は、賢樹の胸に沁みていく。

「…ってやだ、もう塾の時間…二人共ごめん、また明日！」

「お、おう！」

「気を付けろよー」

走って教室を出た少女を見送った後、隼も鞄を持つ。

「俺達も帰ろうぜ、賢樹。暗くなってきたし」

「そうだな。もう冬だなあ」

「新年までもう一ヶ月切ってんだよな。早いな本当、時間って」

全くだなと笑いながら、賢樹はマフラーを巻く。

歩くと黒いそれの端が小さく揺れた。

隼をからかいつつ歩く道中、ずっと賢樹の頭の中では真姫の言葉が渦を巻いていた。

（どうしようも…か）

目の裏に浮かぶのは、真っ赤な少女であった。

○　●　○　●

その週の休日。

（何なんだ急に。話があるって）

賢樹はある人物に呼ばれ、指定された場所に向かっていた。

それは数時間前。

いつも通りの休日の朝を迎えた賢樹の元へ届いた、一件の着信。

その人は常の落ち着いた声で、簡単に用件を告げるとすぐ電話を切ってしまった。

（言うだけ言って…全く）

そうして訪れたのは、主南神社。
境内には誰もいない。

「確か…裏だったよな。」

呟き、歩行を再開する。
人はまず立ち入らないその場所を忙しなく見回しながら歩けば、本堂の裏に白い影を見付ける。
あれだと踏んで、声を飛ばした。

「黄穂！」

「…来たか。休みなのに呼び出して済まない。社の裏は歩き難かったじゃろう？」

「まあな。さて黄穂、用は何だ？」

彼を呼びだした『禽』の巫女はその黄色い瞳を境内へ向けて話し始めた。

「初に聞いたぞ。御前、白い鳥の夢を見たとか」

「ああ。てか、そんな事の為に呼んだのか？」

「そんな事、では無い。此れはとても大事なのだ」

大事、という言葉の言い方が、少し違っていた。
大切という意味は勿論、大変という意味も賢樹は感じ取った。
眉間に皺を寄せる彼を見ながら、黄穂は神妙に告げた。

「鳥居　賢樹。恐らくだが、御前は『禽』だ」

「…は？」

「は、では無い。もう一度言う、御前は『禽』だ。白という事は…『瑤』は無いのか？」

突然の話に賢樹は付いていけない。
当然、彼は首を振る。

「ある訳無いだろ。俺が『禽』だったら、三年前ぐらいに俺ら会ってるだろ？」

「だろうな。しかし御前の夢に現れた鳥は間違い無く『瑤』の力の具現である白い鳥。本当に持っていないのか？」

「だからねえって」

そうか、と僅かに黄穂は落胆する。
それでも、と彼女は続けた。

「御前の近くに必ず『瑤』は在る。そして御前にしかその証は見えん。我等の為に必ず探せ、良いな」

「はあ…」

指差しそう命じると、黄穂は表へ向かう。
賢樹も彼女の後に付いて帰ろうとした。
地に付けた足が、再び空へ。

「…！？」

「『止まり木』！？」

ほんの一欠片の地面の崩れ。
それは大きく彼の重心をぐらつかせるには充分なものであった。
重力に引っ張られた彼は、坂になっている地を転がり落ち、鈍い音を耳に届けて気を失った。

○　●　○　●

そうしてまた、彼はあの空間に訪れた。
暗闇の中、変わらず白い鳥がそこにいる。

〈また会ったな、我が主よ〉

「だからお前、何で俺を主だなんて呼ぶんだよ。昔会ったらしいけど俺は覚えてないし。そもそも俺は本当は、お前等みたいな存在、信じてないんだからな」

〈…何故だ、主？〉

光に包まれた鳥は、首を傾げる。

「何故って…」

返そうとするが、しかし言葉は出ない。
驚いたように目が開かれる。

「何でだ…？」

〈主、前回会った時に我は疑問を覚えた。何故主は我と昔会った事を覚えていない？〉

その問いに彼は眉根を寄せる。
苛立ちや怒りではない。困惑である。

「俺だって知るか。…てか、昔っていつなんだよ」

〈主がとても小さかった頃。みき様がまだ御存命の時だ〉

「それだけで分かる訳…」

記憶を探る賢樹は、ほんの少し、思い出す。
白い小さな石を持った、自分の手と優しく微笑む老婆を。

「！」

〈主、早く我と共に遊んだ事を思い出して欲しい。たとえそれが主にとって辛いものでしかないとしても〉

「辛い…？」

聞き返す事は出来なかった。
ぼやけた誰かの声が聞こえて来たからだ。

〈主、我は何時までも待っている。主の目醒めを…〉

○●○●

「…『止まり木』！」

「……って…」

「漸く起きたか。しかし災難だったの」

主南家、黄穂の部屋。
彼女の布団に寝かされていた賢樹は身を起こし、現状を目に映した。
そこに広がるのは、中学生の少女の部屋。
薄紫色のカーテンに白い壁紙。机やタンスの上には今はもう完結した少女雑誌の単行本やぬいぐるみ。
内向きに開かれているドアには「しほのへや」のプレート、その向かいには姿見。

「…三年前からあまり変わっていない」

黄色い瞳の巫女は振り向いた賢樹を見返す。

「あまり、じろじろ見ないでやってはくれぬか。我の中で彼女が恥ずかしがっておる」

「あ…悪い」

胡坐をかいた賢樹は、黄穂に向き直り報告する。

「…黄穂、今またあの鳥に会った」

「む、そうか。何と？」

「早く思い出せって。俺、あいつに関して何か知ってるらしいんだけど俺は全く忘れてて。…それと、俺は『瑤』に触れた事があった」

僅かに少女は目を見開く。
そして静かに呟いた。

「…そうか」

「探してみるよ。俺がもし本当に『禽』なら、一刻も早く見付けて忘れてた事をあいつに謝って、あいつの力になりたい」

「…そうか」

頷いた黄穂は立ち上がる。

「もう平気だろう、『止まり木』。其処迄送ろう」

「サンキュ」

二人は家を出て信者の石段へと歩く。
その鳥居の前で、黄穂は立ち止まった。

「悪いが此処で。階段でも、出来るだけ離れたくないものでな」

「大丈夫。ありがとな」

最上段に足をかける。

「…賢樹さん」

「？」

声に少し驚き、振り向く。
そこには確かに少女がいた。
しかし、常の超然とした雰囲気は無く。
胸の前で手を組み、心細そうに見えた。
何より、彼女の雰囲気を変えていたのは外見。
髪は変わっていなかったが、その目は人の目、茶色だった。
そう、主南　紫穂がそこにいたのだ。

「いつも、ありがとうございます。お姉ちゃんの事、よろしくお願いします」

「……お前」

「…だ、そうじゃ。それではの、『止まり木』」

長い瞬きの後、また黄穂が現れる。しかし若干顔色が変わっていた。
疲労の色が出ていたのだ。
巫女は話が終わるとすぐ堂へ向かって歩いて行った。

（…人が全然違うな。それに戻っただけであんな疲れるなんて…主南が元に戻したいのも分かる気がする）

石段を降り、帰路へ着く。

（手伝いたいけど、その為の力はどこにあるか分かんねえし…）

藍が混じって来た空を見上げ、思う。

（…それでもどうにかするんだ。…一人で頑張ってるあいつの為に）

そうして戻す視線。

（願い、叶えてやりた…）

その先に、あいつの姿。

セーラー服に、白いマフラーと手袋。

眼鏡の奥は無表情ではなく。

僅かに開かれた目は、分かる者には驚きを表していた。

無関心に通り過ぎて行く人の中、ただ二人だけ時間が止まる。

最初に動いたのは、賢樹の時間だった。

「…よう、主南」

「…え、ええ。今晩は、鳥居君」

それだけ言うと、二人は人ごみの中に溶け込んだ。

俯く二人の気持ちは分からない。

白く吐き出された息が、町中に消えていくばかりであった。

十二・意識　～Ｗｈｉｔｅ　ｊｅｗｅｌ～（後書き）

今回は少々思わせぶりですね。あと黄穂ちゃんが結構メインの回となりました。
分かり辛いので補足を。中々紫穂に戻れないのは、『瑞』の力が強過ぎて制御できるのが今黄穂だけだからです。操縦者の人格が表に出るという感じです。
だからちょっと表に出るだけでも、紫穂ちゃんは命がけなのです。
閲覧、ありがとうございました。

十三．聖夜に降る白　～cannot explain feeling～

暗い暗い部屋に、男女が一組。
男は黒いソファーに深く座り、やはり黒のヘッドフォンで音楽を聴いていた。
女は男に後ろからもたれ、彼のヘッドフォンを取った。
音が漏れ聞こえる。

「玄。こんな日なんだからどこか出掛けない？ずっといたら気が滅入っちゃうわよ」

「こんな日だから出ないんだ。それにここは俺の家、嫌なら出て行ってくれ」

「ごめんなさい。…時間って速いものね。あなたが突然あたしの前に現れてからもう二ヶ月」

女―みちるはヘッドフォンを玄の肩にかけて離れる。
横に周って肘掛けに手を置いた。

「あたしの『止まり木』。あなたは何もかもを知った上であたしの前に現れた。どうして知っているのかしらね？」

「さてね。神様が教えてくれたのかな」

「素敵な神様。…好きよ、玄」

「…ありがとう」

言うと、玄はみちるを引き寄せて抱いた。
嬉しそうなみちるの向こう側で、玄はいつもの笑みを浮かべていた。

○　●　○　●

十二月二十四日、朝。

「全く、何でこんな日に表出なきゃいけねえんだよ…」

制服を着た賢樹は、鞄を持って学校へ向かう。
朝から街は浮かれていた。
数日前からの装飾が彩りを見せ。
客を引く店の従業員は赤白の服を着て。
それは独り身には多大なダメージとなる。

（…畜生）

賢樹も当然その一人で、苦々しい気持ちを店の前に立つ人形に目でぶつける。

（けど、）

と思い直す彼の頭には、やはり初の姿があった。

○　●　○　●

昼、部活動の休憩時間。
部の友人達と賢樹は部室で自分達の弁当をつついていた。

「でさあ、言うんだよ。今日は絶対早く終わらせてね、って。うざ

ってえよな？」

「いや、そう言うお前がうざい」

「ノロケ乙」

「はあ！？何でだよ！！」

弾む談笑を打ち切る、それは携帯の着信。

「鳥居、電話」

「あ、マジだ」

「なんだよ、お前も彼女かよ？」

「ちげーし！」

笑うが、着信の相手は脳裏に閃く赤い少女を示す名。

「…もしもし」

その番号はしかし家のもの、相手は初ではなかった。

〈『止まり木』、先日は急に呼び出して済まなかった〉

「いや、平気だ。どうした？」

巫女の声を聞きながら、部室を出る。

壁にもたれ、空を見上げる。

先程までよく晴れていた空に、雲が見え始めていた。

〈此の休みを利用して、色々調べた。鳥がそうして話し掛けるのは、ある程度の信頼関係を築いており、且つ距離が遠くない時、らしい〉

「距離？遠くないって？」

〈『玉』と『禽』である者との距離だな。遠くないというのは具体的な距離の数値が判らないから此の様な言い方となってしまった。判るのはただ、「遠くない」という事だけなのだ、済まぬ〉

声のみが分かる謝罪に、賢樹は見えない笑みで返す。

「いや、十分だ。つまり近くにあるって事なんだよな？だったら探す所はだいぶ限られる。ありがとな」

〈礼等要らぬ。それでは、の〉

「ああ。…あ、そうだ」

それは普通の、いつもと少し違うだけの挨拶で終わるはずだった。

「メリークリスマス、黄穂」

〈…め？どういう意味だ、其れは〉

「…は？」

それは一つの衝撃。

「何って…今日はクリスマスだろ？」

〈く…ああ、異教の教祖の誕生日らしいあれか。確か其れは明日では無かったか？〉

「まあ。けど大体クリスマスは前日に祝うのが通例だな。…黄穂、お前何でクリスマスを知らないんだよ？」

〈知ってはいる。皆で集まり楽しく過ごすようだの〉

そこで、黄穂の言う意味がようやく分かる。

「ようだ、って…そうか、お前の家は無いのか」

〈無論。主南は神に仕える家。直ぐに分かる事じゃろうが〉

賢樹は言葉を失う。

〈だから明日級友と遊ぶのが初は楽しみだと言っておった。毎年の事だし紫穂もそうだ。…おい『止まり木』、聞いているのか？〉

俯いていた賢樹は、絞り出すような声で問うた。

「…今主南はそっちにいるか？」

〈居ない。明日の集まりの為に買い物に行った。夕方迄帰って来んぞ〉

「分かった。じゃあその頃そっちに行く。…あいつには内緒にしろよ」

数秒の沈黙の後、ふむ、と小さな声が返った。

〈微力ながら手伝うかの〉

「助かる。それじゃな」

電源ボタンを押す。待ち受け画面に記された時刻は一時十五分前。

「…よし。頑張るか」

笑みを作る口に気付かないまま、空を伸びをする。

白く、重い雲が陽を遮っていた。

○●○●

同日五時。

家に帰った初は、習慣を越えた挨拶を口に出す。

しかし、誰からも返事は無い。

「…紫穂、いないの？」

居間を覗くが、やはり誰もいない。

首を捻りながら自室に戻ると、

「遅かったの」

「…！紫穂、何やってるの」

暗い部屋の中、黄穂が正座をしていた。

呆れながら電気を点けた時、服が二着、散らばっているのに気付く。
「…ちょっと紫穂。勝手に服広げないで」
「時間が少ないから選んでおいたというのに。さて、何方(どちら)を着る？」
「…は？何でよ」
上着を脱ぎながら不機嫌そうに問う初。
表情を変えずに黄穂は答えた。
「これから『止まり木』が来るからに決まったおろう」
「『止まり木』？…鳥居君が、どうして？」
その声が聞こえていた、それ程絶妙なタイミングでチャイムが鳴った。
「ほれ」
「…どういう事よ」
「知らぬ」
初は溜め息をつく。
「全然分からないわよ。何で鳥居君が」
「兎に角何方にするのだ？早く決めんか」

もう一つ溜め息をつく初。

「…どっちだって良いわよ」

「では此方にするぞ。さあ、着替えんか」

（状況が掴めないわ…）

仕方なく黄穂の選んだ服を着る為、着ていた服に手をかけた。
それからおよそ五分。
ずっと表で待っていた私服姿の賢樹は、扉の向こうで声を聞いた。
行って来ます。そう、耳にする。

「…お待たせ。何、今日は」

「いや、大した事じゃ…」

「…何なの…本当」

目に飛び込む姿に、言葉を失う。
タートルネックの黒い薄手のセーターに、赤いチェックのオーバースカート。
黒いタイツと飾りの留め具が付いたブーツに包まれた足はすらりと長く。
下ろした髪はよく梳かれていた。
胸元にはあの日賢樹が送ったペンダントが光っていた。

「…いや、何でもない」

「…そう…」

（やば、可愛いなんてもんじゃねえ。綺麗だ）

まともに初を見る事が出来なくなった賢樹は、先に歩き出す。

「…行くぞ」

「どこによ」

「…月映（つきうつし）オゼロメスト」

初の顔は戸惑いを見せる。

月映オゼロメストとは、二人の住む星灯市から電車で三十分程にある隣町、月映市のショッピングモールの事である。

数年前からあるそこは、今も若者に人気の場所だ。

道中を無言で向かう二人。

駅に降り立つと、多くの人々がそこを歩いていた。

「…人ごみ嫌いなの、知ってるでしょ」

「ああ。けど外に出るクリスマスも良いだろ？」

「…だからなのね」

やっと合点がいった初の手首を賢樹は掴む。

「鳥居君、別に手首掴まなくても平気…」

「これだけ人が多いと絶対はぐれるだろ。…力があるとはいえお前は…」

その後の言葉は聞こえなかった。初は本日三度目の溜め息をつく。
しかし彼女はある事に気付かなかった。
吐息した自身の口が、歪んでいた事に。
その後は行き当たりばったりで行動した。
居並ぶ店を物色したり。
至る所で輝くイルミネーションに目を奪われたり。
小さな二人きりのクリスマス、その時間が過ぎて行く。
どちらからともなく帰ろうと思い、自然その足はスタート地点へと向かう。
どうして、からその言葉は始まった。

「…どうして、私をここに連れ出したの」

「黄穂に聞いた。お前ら主南家はクリスマスやんないって」

「そうだけど。…鳥居君には関係ない事よ」

途中、寒さを覚えて貸してもらった賢樹の上着の中。
初の視界の端に何かが映った。
白いそれは大粒の雪。
天からの思わぬ落し物に、人々は思わず足を止める。

「…雪」

「ホワイトクリスマス、だな。めったに無いぜ」

白い吐息が口から出でる。
その口を閉じ、賢樹は振り向いて正面から初を見る。

「主南、俺が今日ここにお前を連れ出したのは、クリスマスを楽しむだけじゃないんだ」

「…？」

黄土の髪が揺れる。首を傾げたからだ。
鳶色の髪が動く。歩を進めたからだ。

「…俺が。お前と一緒に楽しみたかったからだ。クリスマスを」

「…え」

向かい合い、

「主南。…俺はお前が好きだ」

白を告げる。
北風が吹く。
髪が、服が靡く。
それでも、二人の瞳は互いを捉えている。
初は驚きを。
賢樹は真摯な気持ちを。
その顔に表していた。

十三．聖夜に降る白　～cannot　explain　feeling～（後

作者は無宗教ですので、とくに宗教に関しては何も考えておりません。
神道に入ってるからといってキリスト教系イベントをしてはいけないみたいな事などは全く考えておりません。
ただ初達主南一家は祝わない、それだけです。

閲覧、ありがとうございました。

十四．神前にて　～We，swear～

「ごめんなさい」

最初の言葉は、それだった。

「…え」

「あ…違うの。すぐには答えられないって意味。それに対する『ごめんなさい』よ。…少し、時間をちょうだい」

張り詰めた心が弛緩する。

脱力と共に、安堵の溜め息が賢樹の口から漏れた。

「よかった…ダメかと思った」

「…まだ分からないわよ？」

「う…」

口ごもる賢樹を初は笑う。

「とにかく、今日は帰りましょう。ありがとう。素敵なイヴを過ごせた」

「…どう致しまして」

また、駅に向かって歩き出す。

はぐれないように、手首を掴んで。

○●○●

それから八日後。

「…お、来た来た」

一月一日、午後。
賢樹はポストに入っていた年賀状を手に取った。

「毎年律儀だな、坂口は。あ、今年は隼も書いたか」

友からの祝いの葉書に、顔を綻ばせる。
しかし、届いた全てに目を通した後の彼は、無表情だった。

（…当然か。主南には住所教えてなかったし…）

真姫辺りの計らいを期待していた賢樹は、複雑な思いを胸に抱く。

（…もし教えてたら、今この場で分かったのかな…返事）

恐怖と希望とを抱きながら、彼は葉書に書かれた自分の名を見る。
それでも教えれば良かった、賢樹はそう悔やんだ。
その時、腹辺りに違和を覚えた。
パーカーの腹ポケットから違和の正体―震える携帯電話を取り出す。
開く。目に飛び込む文字は、『佐久間　隼』。

「隼？」

軽く首を傾げながら通話を開始する。

「もしもし。何だ？」

〈おーあけおめ賢樹。今から初詣行かねーか？〉

そういえば、と賢樹は頭から抜けていたそのイベントを思い出した。

「行く行く。予定もないし」

〈そーか！じゃあ俺は坂口連れて一緒に行く。場所はお前が決めろよな！〉

「了解。あ、年賀状ありがとな」

〈おう！〉

楽しそうだな、心中で呟きながら、隼からの『課題』をすぐうに済ます。

（初詣って聞いて今の俺が行くのは…あの場所しかねえしな）

○　●　○　●

「主南神社って…初ちゃんの神社だよね！？」

「ああ。良いだろ？」

「うんうん！久々だなあ、初ちゃん！」

山吹色の振袖を身に纏った真姫は、偽りない笑顔でそう言った。

石段を上っていくと見えてくる境内。
やはり正月の昼だけあり、社の前には多くの人が立つ。
「どんだけ並ぶんだろうなあ。かなり長そうだぜ？」
「来たからには並ぶぞ。…よし」

気合いを入れ、参道に並ぶ。
そこに声が飛んだ。
「すいません、参道に並ぶ前にはまず手水場へ…って」
「お、黄穂。明けましておめでとう」
「とま…御前、初詣に来るような奴じゃったのか」
「これでもな」
いつも通り、巫女服を着る少女がそこにいた。
隼と真姫は二人を見て言った。
「…賢樹。お前まさか中学生にまで手を…」
「…こんな事なら遅くに生まれておくべきだったかも…」
「おいちょっと待てお前ら。こいつは主南の妹だぞ。それだけだからな！？」

怪しい、そんな目で睨まれながら賢樹は黄穂に尋ねた。

「あいつは？主南…初は？」

「初なら向こうで御神籤やら破魔矢を売っておる。参拝した後で行けよ。挨拶は何事においても基本じゃからな」

言うと『禽』の巫女はすぐに境内を周りに戻った。

「そっけない感じは初ちゃんに似てるね」

「いや、姉より素直で良い子だぞ。ちょっと…ああいう喋りをするだけだ」

「へえ、姉より素直、ねえ…」

その後賢樹はまたしばらく、隼達に白い目で見られていた。

○●○●

長い黄土の髪は一つに束ねられ。

初めて会った時の姿によく似た初は、賢樹達の姿を見ると少し、柔らかい表情になった。

「よう主南、暇してんな」

「…今日は鳥居君。そう思うなら何か買って頂戴」

白い小袖から覗く細い手で、お守りや札を示す。

それらを見て、三人は口々に。

「私ピンクのお守り！それとおみくじ！」
「じゃあ俺はそのブルーので。それとおみくじ」
「俺おみくじだけで」
「…お守り三百円、おみくじ百円です。…鳥居君が一番ケチね」
何でそうなるんだという言葉は飲み込み、賢樹達は金を出して品物を受け取る。
「初ちゃん！私三十五番！」
「俺は二十二番だった。よろしく」
「…七十五番」
黙々と初は作業をこなす。箱から出た棒を三人から受け取り、言われた番号と該当するおみくじをそれぞれに手渡す。
早速開けば、三様の感想が飛び出る。
「えっと…あ、私大吉！北の方角って隼のお家の方かな？」
「合ってると思う。俺凶だったよ…学業に専念しろって」
「そうだよ、これから受験始まるし。あ、サッキーは？」
聞くが、返事は無い。
彼はくじではなく、何故か初を見ていた。

「おい、賢樹？」

「あ、ああ。中吉」

「お前もかよ！何で俺だけ…」

落ち込む隼を少し笑った後、賢樹はまた初を見る。
初はただ目を瞑り、口の前に人差し指を立てるのみ。
何の変哲もない中吉のおみくじ。
それと一緒に、賢樹は小さな紙を手渡された。
初の手書きでたった一文、「後で社の前で」。そう書かれていた。

○●○●

神社を出た後はいつもとなんら変わらずに遊び呆けた。
夕日が沈もうとする頃、賢樹は用があると言い二人と別れた。
気が付けば彼は走っていた。
三人と喋って歩けば何て事の無い距離は、少し息を切らせた。
石段を一気に駆け抜け、朱色の門をくぐる。
そこに佇む少女は幻のようだった。
紅白の鮮やかな装束は鳥居と同じ色に染まる。
流れる髪は夕陽を浴びて稲穂のように黄金に輝く。

「…主南、悪い。待たせた」

「大丈夫。今日の仕事、今終わったから」

不機嫌という声音ではない。
感情を敢えて言うとするなら、少しの諦めと寂しさを、隠したよう

な。
それの真実を知る手立ても、癒す術も今の賢樹にはない。
だから彼はただ近付いて、もう一度謝った。

「…ごめん、主南」

「だから大丈夫よ。…来てくれたから」

口の端をほんの少し上げた笑み。それで十分だと悟った彼は問う。

「…さっきのって」

「ええ。イヴの答え、言わなきゃと思って」

それはずっと待ち望んだもの。
本当は紙を渡された時からそれを言われるだろう事は分かっていた。
気付かないふりを、賢樹はしていた。
心臓は早鐘を打っていた。
今すぐ踵を返して逃げ出したかった。

「鳥居君…あの日から、私は考えたわ」

しかし、宣告は始まった。
もう逃げられない。
逃げる事は、出来ない。

「あなたと出会ってから、今日までの事全部を」

言葉が上手く、脳の中に染み込んでいかない。
だから彼女の言葉の殆どは、聞き逃していた。

「喧嘩ばっかりだったけれど、それよりあなたと過ごす日々は酷く楽しかった。あなたがいなければ解決出来ない事が沢山あった」

彼女の目は参道の石畳を映す。

窺い知れない彼女の感情と表情にもどかしさを覚えた。

「信頼、そう思ってたわ。そうじゃなきゃ人付き合いの下手な私がこんなに打ち解ける訳が無いってそう考えてたから」

彼女が動いた。

真っ直ぐに見返す、瞳の光が眩しかった。

「それすらも違うと思えたのは、あなたからの告白だったわ、鳥居君」

そこでようやく、理解が追いついた。

はっきりと見えた初の顔には、僅かな朱と、明らかな笑み。

「私も、同じだった。あなたの事が好きだったみたい」

初は手を差し出した。

「…！」

「これからもよろしく。…賢樹くん」

その感情は、「歓喜」は。

握手だけでは到底治まりそうになかった。

手を引っ張り、初を自らの胸に抱いた。

「…ちょっと、鳥居くん！」

「悪い。…嬉し過ぎてさ」

そう言うと初は黙って身を委ねた。
言葉は交わさず、長く動かず。
二人はしばらく、そのまま動かなかった。

○　●　○　●

暗い夜。
雲が出て星もまるで見えない。
神社の中心で焚かれる炎が、主な光源。
それに魅かれたように、ふらりと現れる人影。
みちると玄であった。

「…遅かったの」

二人に話しかけるは、『禽』の巫女。

「お出迎え？ありがとう、巫女さま」

「ただの勘だ」

「へえ、女の勘ってこんな時からあるんだな。怖い怖い」

息を一つ大きく吐き、黄穂は普通の神社の娘として聞く。

「…お守り三百円、破魔矢六百円、神籤百円」

「じゃあおみくじ頂こうかしら」

「二つでよろしく」

また一つ、黄穂は荒く息を吐く。
二人をテントへ案内し、箱から棒を引かせる。
ただ一つの電球が点くその中で、少女は二つの紙片を手渡した。

「言っておくが家の神籤は良く当たる。従った方が良いぞ」

「ごめんなさい、あたし占いとか全く信じてないの。あら、中吉だわ、微妙」

「俺は末吉。微妙さ加減じゃ俺が上だな」

言葉を聞いて、黄穂は彼らが来るまで行っていた片付けを再開する。
運ぶのは商品と小さな金庫。黄穂一人で十分運べる量だった。

「…何これ、待ち人来ず、恋愛望み叶わぬ、他を当たれって」

「待ち人は俺も一緒だ。嫌がらせか？」

「其の様な事をする訳無かろうが。其れが御前達の今年の運勢だ」

黄穂は炎を背後にそう告げる。
そして歩き出す。二人を残して。
『禽』の巫女はそれ以上、何も言わなかった。

十四．神前にて　～Ｗｅ，ｓｗｅａｒ～（後書き）

ようやくです。
といっても大して変わる事は無い二人だったりします。
ここで初から賢樹に対する呼び名が変わります。注意して見ると初のデレ度が分かったりします（笑）

閲覧、ありがとうございました。

十五．夢からの目醒め　～ｐａｓｔ　ｆａｎｔａｓｙ～

それは急に見えた。

「おはよー母さ…」

「おはよう賢樹。あら、おばあちゃんの仏壇がどうかしたの？」

「いや…何でも」

祖母の形見の護り石が、光り輝いているのを。
陽光を受けてではない。石自身の内から、鳥が翼を広げたような不思議な光を発していたのだ。

（これってまさか…）

賢樹は石を手に取り、見つめる。

（『玉』、なのか？）

壁に留まるカレンダーを見た。一月の十一日、平日である。
そして偶然にも部活が無い日であった。

（授業が終わった放課後に聞きに行ける。よし）

すぐに仏壇の前に座り込み、日課をいつもより早く行う。

「…ばあちゃん、今日も借りてくな」

祖母が頷いたかのように、手向けた線香の煙が揺らいだ。

○●○●

冬の陽の沈みは早い。四時を過ぎた辺りで空は既に蜜柑の色となっていた。
それでも仕事を休める手は主南　黄穂には無かった。
落ち葉はないが、積もる参道の塵を今日も黙々と払う彼女の耳に、自分を呼ぶ声。

「おーい、黄穂！」

「…『止まり木』か。どうした、血相を変えて」

巫女の前で止まった賢樹は、息を整えて問いを発した。

「…これ、『玉』なのか？」

「何だと？」

石を受け取った黄穂は目を瞑り、両手に持ったそれに意識を集中させる。
しばらくして黄穂は目を開けて尋ねた。

「見えたのか、羽を広げたような光は？」

「ああ。今だって見えてる」

「なら間違いない。此れは御前の『瑤』で、御前は白の『禽』だ」

白い石―『瑤』を返し、黄穂は力強く笑う。

「美しい力だ。最初に初の手に渡った時の『珠』より、ずっと綺麗で良い力を宿している。守っていた者は余程それを大事にしていたと見える」

「そうか…」

彼は『瑤』の前の持ち主を考える。それはつまり、賢樹の祖母。いつも大事に小さな巾着の中に入れていたそれと祖母を思い出し、賢樹は祖母をより誇らしく思った。

「…あいつみたいに、今飛んでみて良いか？」

「我は構わん。青の『禽』達に見つかっても良いならな」

頷き、賢樹は『瑤』に意識を集中する。

数秒。

数分。十数分。

賢樹の姿は、どこも変化しなかった。

「…あれ？」

「しっかり集中しているか？雑念があっては力を得難いぞ」

「ああ…もう一度」

結果は同じ。

名残惜しそうな夕日と、星や月が空に光る。

「…ダメだ、何も起きねえ」

「そうか。だったら初に聞いてみたらどうだ？我より多く『禽』の力を使っているし、今丁度帰って来た」

「え」

振り向くと確かに、見慣れた黒のセーラー服。
彼女が鳥居をくぐってこちらにやって来た。

「ただいま紫穂。…久々ね、鳥居くん」

「あ、ああ。…久しぶり、主南」

恋人同士となり、十日。
会うのもまた、十日ぶりであった。

○●○●

「鳥居くんが『禽』…見つかって良かった。これで後は『玖』だけね」

「『玖』も『碧』同様、浄化の必要な『玉』だ。青の『禽』より早く見付けねばな」

「それにしても、力を使えないってどういう事なの？」

主南家、初の部屋。
三人は『瑤』を囲んで話し合う。
窓からの光はもう大分少ない。

「それが分かったら苦労しねえよ。…なあ主南、お前はどうやって力を使ってるんだ？」

「特に何もしてないわ。…そうね、力を貸して下さい、みたいな願いはかけてるかも」

「願いか…」

賢樹は初の言うように、手の中に『瑤』を握り込んで念じる。

（『瑤』、お願いだ。力を貸してくれ）

そうして数秒。
そしてまた、数分、十数分。

「…またダメか」

「変ね。後はもう気持ちの問題かしら」

気持ち、と呟く賢樹に初は頷く。

「覚えてるかしら、あなたが『止まり木』だって分かった時。現実に起こってる事をあなたは否定しようとしたわ」

「まあな、現実であんな事されてもまず信じられなかったし。さすがにもう認めざるを得ないがな」

「それかもしれないわね」

つ、と目を細めた赤い『禽』は説いた。

「昔の人は天災とかを『神の仕業』として全てを受け入れて来た。
大昔からある『玉』なんだからそういうものを『受け入れる事』が
必要なのかも知れない」

「……」

その日はそれで、話は終わった。
暗い帰路、目立つ白い星を仰ぎ見ながら賢樹は考える。

（受け入れる、ね…）

そういえば、と思考の奥深くに小さな光を見る。

（ガキの頃は何でもかんでも信じてたな…）

そして閃く記憶。

（…そうだ。あの頃は魔法とか幽霊とか、いつも信じてた）

そんな話はいつも祖母がしてくれていた、と記憶の鎖が連なっていく。

（いつからだ、いつから俺はそういうの、信じなくなった…？）

足は既に止まっていた。
ただ白い星を仰視する。
そこに答えがあるかのように。

（魔法とかマンガや本を見なくなったのは…小三の頃だ。その前、もっと奥…！）

しかし。
そこから前の記憶は無かった。
急に、求める記憶よりもっと先の、小さな頃の記憶に飛ぶ。

（…分からない）

そこに鍵がある筈なんだ、ただ口だけが言葉の形を作る。
街頭に照らされる彼に、光は見えない。

○　●　○　●

ずっとずっと、考えていたからか。

〈漸くだな、我が主。漸く主は我と共に戦える〉

「…お前」

白い鳥との三度目の出会いを、彼は果たした。

「そう言うなら俺に力を貸してくれよ」

〈何を言っている主。我は既にずっと前から主に手を伸ばしていた。
その手を取らないのは主の方〉

「え？俺の方？」

鳥は頷く。

〈みき様が亡くなられてから、主はおかしくなられた〉

「ばあちゃん…？」

鳥はまた頷いた。

〈我を見なくなった。話し掛けもしなくなった。そして我の存在も忘れていた。あの時迄〉

賢樹は真姫と隼が操られた文化祭を思い出す。

確かに夢の中、この光の鳥は賢樹を知っていた。

〈まあ無理も無い、仕方の無い事。あんな事があってはな〉

「あんな事？」

鳥は独り言を口の中で言っていた。

それでも頭に直接響く声はそのまま届く。

〈あんな事が遭っては我を、此の力を厭うのも道理に適う〉

（厭うって…）

〈主〉

鳥は今度ははっきりと、賢樹に向かって言った。

〈我をもう嫌わないで欲しい。恐れないで欲しい。誰も悪くないのだ、主も悪くない〉

「は？」

伝えるとすぐ、鳥は闇の彼方へと消えていく。

「ちょっと待てよ！なあ、おい！」

叫びは鳥を留める事は出来なかった。

○　●　○　●

「…はぁっ！！」

長く水の中にいたような、そんな疲労感。
周囲は大気に満ちた、自分の場所、自室。
汗で背が濡れた寝間着が気持ち悪い。

「何だ、何なんだよ一体…」

枕元に置いていた『瑤』はあの日から変わらず羽を広げる。
それを見て脳に過ぎる、禽の最後の言葉。
誰も悪くない。

（俺も悪くない？…俺は何か、悪い事を？）

そう考えた瞬間、
金属を打ったような高い響きが、賢樹を呼び醒ます。

「…っ！！」

思い出していく何もかもに、賢樹は知らず、涙する。
空が高かった日。
少年は大好きな祖母と『キー』と一緒に、公園に出かけ。
『キー』の羽を借りて、空を舞った。
遠くへ行こうとする少年を祖母は追いかけ。
いつしか広い道路に出てしまった老婆は。
車に気付かず、振り返った少年の、目の前で。

「うわあああ！！」

それが、消えていた、求めていた記憶であった。
その日から、少年―賢樹は力を恨み、忘れ、有り得ない事象を信じなくなった。
祖母、みきと共に付けた『キー』という鳥の名さえも、この世に初めから無かったようにその頭から消して。
賢樹は、幻想を否定して生き続けてきたのだ。

「…キー」

小さく呟く、懐かしさを覚える名に応じる者はいない。

「そうか…そうだよな。否定してて当然だ」

『瑤』を砕く勢いで握り締め、賢樹は俯く。

「俺がキーの羽を借りなければ、ばあちゃんは、死なずに済んだから…！！」

その日、鳥居　賢樹は学校を休んだ。
ずっと部屋に閉じこもり、声を殺して泣いていたという。

十五．夢からの目醒め　～ｐａｓｔ　ｆａｎｔａｓｙ～（後書き）

ここで一旦本編の流れが切れます。
１６話は物語全体の補完といった所となります。
これで多少の疑問は解決されればいいな…（笑）

閲覧、ありがとうございました。

十六．選ばれた理由～Purple&Yellow～

ある日の深夜。
主南　黄穂は自分の布団から勢い良く身を起こす。
響く声が一つ。
それは、少女の頭の中だけに。

（如何（どう）した、紫穂？）

紫穂と呼ばれた少女は、話しかけてくる自分に返す。

（…あの日の夢を見たわ、黄穂）

主南　黄穂、否、主南　紫穂の対話は、真夜中に始まった。

○　●　○　●

（あの日の夢とは…我が御前の身を借りた日の事か？）

（うん、そう。自分の体が殆ど自由にならなくなった時のあの気味悪さは、そうそう忘れられない）

（済まない。『期限』の時まで我慢してくれ）

僅か、少女の首は動く。首肯だった。今、体を動かしている少女は紫穂のようだった。
ところで、と紫穂は聞いた。

（どうして、どうして私を選んだの？それに決まっていた事だった

ら、もっと早く、生まれた時でも良かった筈）

（あの時期あの時周りに居た人物、其の中で御前と一番波長が合ったからだ。我と波長の合う者はそうは居ない。名誉な事ではあるぞ）

少女は小さく嘆息する。

（全部、波長なのね）

（其れが一番大事なのだ。波長が合わねば対話も出来ぬし力も使えぬ。御前の姉も青の『禽』も皆同じだ）

少女の目が小さく開いていたカーテンの向こうを見る。
下弦をとうに過ぎた月が青白く光る。

（…寝られないわ）

紫穂は頭の中で呟く。
それを受けて黄穂は始めた。

（なら、我が昔話でもしてやろう）

（珍しい。いつもなら明日の為に早く寝ろの一点張りなのに）

（良い機会だからもっと我等の事を詳しく知って貰いたいのだ。『禽』の巫女として、主として）

紫穂は意識の奥で頷いた。

○　●　○　●

どれ程昔だったか、もう分からない程の昔。
それは太古満ち溢れていた自然の力だったのだろうか。集まったそれは丸石の中で一つの意識を形成した。
そうして、『玉』は生まれた。
五つの『玉』には使命があった。
黄色い『玉』―『瑞』は天地を侵そうとする魔を退け、四色の『玉』―『珠』、『碧』、『瑤』、『玖』は『瑞』の強過ぎる力を抑え、時に力を強める役目が。
日蝕の時に現れる、魔を滅する五つの『玉』は、互いに親交を深めた。
空を自由に飛び回る鳥の形に力を変えて、それぞれが納める土地へ行っては他の『玉』と語らった。
ある時。
数十年の周期で現れる、魔を退ける時だった。魔はその爪で『碧』と『玖』に傷を付けた。
速やかに『瑞』の力で魔は祓われた。欠けた場所は仲間内で補い、癒した。
しかし、二つの『玉』は外だけでなく、内にも傷を付けられていた。
傷の名は疑心。
内の傷を癒す為、定期的な浄化が必要となった二つだが、その絆も傷付けられたのか、段々と交流は途絶えていった。
『碧』が海に沈み救いを求めても、『玖』に罅が入った時も、三つの『玉』が知る事も無い程に。
当然協力を募る事は出来なくなり、残る三つの『玉』でしばらくは魔を退けていた。
やがて、『玉』達は人の方がより自分達の力を使える事に気付いた。
人と『玉』の交流はそうして始まるが、二つの『玉』を欠いた状態での魔の撃退は必ず犠牲者を伴った。
少なくとも毎回、『瑞』の持ち主はそれの持つ強大な力によって命

を落とした。
五つの『玉』全てが揃っていないと、力は制御出来なかったのだ。
その力を行使する側、人は度々『玉』の力を目の当たりにした事で自分達を超える者を知覚し、『玉』を祀るようになった。
しかし人との交流さえも無かった二つの『玉』は、そう思われる事も無かった。
蹴られ、投げられ、打ちつけられ。魔の影響で冥い感情に支配された『玉』は人を憎むようになった。
そうして、二つの『玉』と三つの『玉』は衝突をするようになった。
悪しき考えを持つ者と共に、三つの『玉』の使命の邪魔をする。敵のような立場に回ってしまったのだ。
それから数百年程して。
今に近い年。『瑞』はある予知をした。
次の日蝕に、今まで訪れた事の無い、強い力を持つ魔の来訪を。
『瑞』は考えた。今回だけは五つ揃わないと世は滅びる、と。
だから『禽』の巫女となる自信の持ち主を探し、待った。
そして現れた少女、主南　紫穂。
彼女を選んだのだった。

○　●　○　●

（…その事をどうして…『期限』をみんなに伝えないのはどうして？）

（教えたら如何なるか、大体は想像がつくだろう。人は弱い。戸惑い、望まぬ行動を起こす。其れは避けたいだろう）

ずっと月を見つめていた少女が、目を伏せた。
そうする事で納得を表したようだ。

（大丈夫だと思うよ。お姉ちゃんと、賢樹さんなら）

（そうか）

少女はまた床に背を付けた。

（…『禽』の巫女に意味はあるのかな）

（有る。肩書きの無い者に人は従わぬ。古来から人は神等の使いには特別な目を向けて来ただろう）

（そうだね…）

少女は目を閉じた。
尚も会話は続く。

（だからあなたは、私の口で語るのね）

（我の場合は特殊だからな。『瑞』は『禽』にすら影響を及ぼす程強い力を持っている。均衡が取れぬと『禽』を殺す程にの。…安心しろ。魔を祓う時はきっと全ての『玉』が揃っておる）

首を上下に振る少女。
それじゃ、と紫穂は言う。

（眠くなってきたから、寝るね）

（そうか。ゆっくりと休め、紫穂）

（うん。お休み、黄穂）

五分程経ち、安らかな寝息を少女は立て始めた。
寝返りを打った少女の胸元を、何かが滑った。
金鎖に繋がれた、小指の爪程の黄色い石。
それが月光を浴び、星のように光っていた。

十六、選ばれた理由〜Ｐｕｒｐｌｅ＆ａｍｐ；Ｙｅｌｌｏｗ〜（後書き）

三か月程の開きとなってしまいました…
今回の話は今までの補足、となります。
一話の訳の分からなさがここで解消されればな、と。

閲覧、ありがとうございました。

十七．幸福と共に～It's a smiling day～

二月中旬。細かく言えばその十四日。

「分かってると思うけど。…はい、鳥居くん」

「…ありがと」

恋人達にとっては特別な日、バレンタインデー。

「開けて良いか」

「ええ」

某県星灯市、主南神社。

「お、美味そう」

「味には五月蝿い黄穂が、美味しいって言ってくれた。実際に美味しいのよ」

本殿から数メートル離れた地点、神官である主南の家。

「…！本当に美味い…」

「でしょ？…といってもそんなに加工とかしてないけどね。チョコレートだし」

その縁側、彼等は隣り合って座っていた。

「彼氏」―鳥居　賢樹と、「彼女」―主南　初は、互いに違う学校の制服を着たままでいた。
初から呼び出し、駅で待ち合わせたその足でここに来たのだ。
しかし二人の距離はどこか遠い。
実際、駅から神社へ向かう際も、楽しげに話こそすれ、手も繋がなかった。
今も座る二人の間には、不自然な距離がある。

「主南、お前は食べたのか？」

「私？食べてないわ。作ったら食欲無くしちゃったの」

「じゃあほら、食え」

そう言われ差し出されるチョコレートを、初は一口。
少女の顔に温かい笑みが広がっていく。

「うん。…美味しい」

賢樹はそれを見て、一瞬高鳴った鼓動を自覚すると共に、心からの笑みを浮かべていた。
彼は心のどこかでこう思っていた。
彼女とどうこうなりたいとか、したいだなんて思わない。
ただずっと、こんな風に一緒に居たい、と。
その考えが隅に追いやられたのは直後。
ゆっくり落ちて来たのは、真っ青な鳥の羽根だった。
その色を持つ生き物は、一つだけ。

「…今年も懲りないわね」

「チョコは終わってからのお楽しみか。まあいいか」
賢樹が大儀そうに立ち上がった時には、既に初は黒いセーラー服ではなく、緋色の装束に変わっていた。
賢樹は今までそれを見た時は、純粋に綺麗だとしか、感じていなかった。
今彼は、それを多くの気持ちと共に瞳に映す。
懐かしさと、羨みと、憎悪と。

「…鳥居くん？」

「あ…よし、行くか」

初の言葉で我に返るが、表情は未だ曇る。
少女の腕に包まれながら上空に向かう途中、やはりそれを指摘された。

「大丈夫なの？」

「…ああ。ただ早く、俺も『禽』になりたいなってさ」

「なれるわよ、きっと今だって。あなたの事だからもう鍵は見付けてる筈。…見付けてもいなかったら
、私も一緒に探すわ」

顔を伏せた賢樹は礼を言わなかった。
あまりにも優しい言葉に、口を開いたら泣き声が出そうになっていたからだ。
そうして黙り込んでから数分。
みちると玄の姿を目に捉える。

「…鳥居くん、練習として、翼を生やしてみる？」

「おう、頼む」

頷き、初は哥う。

『迷宮から今出でよ、若者よ老いた者よ。天から与えられし羽を纏え。恐るる事無かれ、陽の下(もと)まで行ける。其は汝の思い描いた儘に…創翼・心空』

初は賢樹の体から手を離した。瞬間、火が昇り立つように橙の翼が彼の背から現れた。

「うおっ！」

「羽ばたきなさい！後は移動するイメージを持てば良い。すぐに慣れるわ」

指示するとすぐに初はみちるの元へと飛んだ。

「え、おい！…ったく」

言われたとおりのイメージをすると、翼は賢樹の行きたい所へ連れて行ってくれた。

（…今はイメージで精一杯…昔はどう飛んでたっけ）

失われていた事故の記憶を掘り返す。

そこにはただ自由に空を飛ぶ幼い自分がいた。

（そっか…疑わなかったんだ。飛べないとか、出来ない事は無いって）

ブレザーの上着の胸辺りを強く握る。
そこには賢樹の『瑤』がある。
少々馬鹿らしいと思いつつも、彼は呼びかける。

（なあキー。…早くお前の羽根をまた借りて、あいつと一緒に戦いたいよ）

そうだな、と。そんな言葉を賢樹は聞いた気がした。

○●○●

「あら『止まり木』くん。羽なんか生やしちゃってどうしたの？」

「座ってたら良い標的になるからな。あとそろそろで名前で呼んでくれ」

「…じゃあ、鳥居クン。これから先あなたも攻撃するから、よろしく」

「前からだろ」

そうだったわね、とみちるは凭れていた自分の『止まり木』―要片玄から離れた。

「今日こそあなた達を倒してみせる…『降煌氷涙（こうこうひょうるい）！！』」

雫の形をとった氷が無数に降り注いだ。
それを見て、初が不敵に笑う。

「同じような技ばかりで学習がないわね。『防護・金城』」

「人の事言えないじゃない。『凍塊(とうかい)一滴！』」

『降煌氷涙』を防ぎながら、初は口を動かす。
そして、『金城』に指を当て一言。

『返仇(へんきゅう)・張鼓(ちょうこ)』

波紋が円い、光の盾に広がる。
『金城』はその時から、受けるだけの盾ではなくなった。

「跳ね返し！？」

みちるの言葉通り、先程の『氷涙』が彼女の作りだした巨大な氷にぶつかっていく。
氷塊は煙を巻き上げて砕け散った。
だが煙から垣間見えたみちるの顔には笑みが広がっている。

「ヒント、ありがと初ちゃん。あたし、百聞は一見にしかずってタイプなのよね」

真っ直ぐに指を立て、哥う。
『氷星羽群』、と。
その指先に蒼い力が集まっていく。

「…！鳥居くん！」

「逃がさないわよ」
後退しようと二人が翼を動かした時。
降り注ぐ、様々な氷の欠片達。
『哥』によって形と指示を与えられた小さな氷塊が二人を取り囲む。
「さぶっ…！」
「だったら融かした方が良いかしら。『蒸雪（じょうせつ）・鳳着（ほうちゃく）』」
三枚程羽根を抜き、散らす。
数秒し、二人が氷の群れで身動き出来なくなる寸前。
群れの中心から、炎が広がった。
炎は氷を喰い潰し、後には二人以外残っていなかった。
「…何だ今の、戦略級爆弾みたいな『哥』」
「……ちょっと、休ませて。イメージより強過ぎた。地上でやったら…騒がれてたかも」
「おいおい、やり過ぎだろ…」
みちる達を見据えながら、初は考える。
（…また力の質が変わってる気がする。この前までは今ので丁度良かった筈…）
勝てる、今度こそ。初はわざと賢樹の肩を掴む。
飛翔し、『哥』を織る。

『其は我が心の防壁。何者をも阻む我が忠実なる盾…盲壁・気阻』
更に続ける。
「『煉剣・朱片』、『炎嵐・紅風』…絡まれ『紅風』、『朱片』へ！」
（…すごい。ここまで哥ってもまだ余力がある）
口の端で笑い、みちるへ突進する。
「『氷縄永牢』、やらせない！」
「それで自分を守ってるつもり？」
炎を纏った赤い刀は、楽に鎖を断っていく。
「…！！『凍塊一滴！！』」
「甘いって言ってるのよ」
更に作り出した巨氷を一閃、みちるの元へ到達する。
「くそぉっ…！」
「今日こそ頂くわ、あなたの『碧』を！」
首元を切る。
空に、『碧』が踊った。

「！！」

みちるの変身が、青い羽根となって解けていく。

「やった…！」

落下してくる青い『玉』を、手を開いて待つ。
しかし。

「みちる！」

「玄！」

落ちるように玄は、初より先に『碧』を掴んでみちるへ投げる。
玄が背負っていた水色の羽は、力の供給が途絶えたまま飛んだせいでバラバラになっていた。
受け取ったみちるはすぐに翼を纏うと哥った。

『仮小羽矮！！』

すぐに水色の翼が玄の背に出来上がった。

「助かったよ、みちる」

「当然よ。あなたはあたしの『止まり木』だもの…」

その態度に、『禽』と『止まり木』以上の何かを初は感じた。

（もしかして、みちる…）

「初ちゃん、鳥居クン」
呼びかけるみちるは、いつもの態度に戻っていた。
「今日は引き分けって事にしとくわ。なんだか今日はもう、戦う気が失せちゃった」
言うと、みちるは高速で街に降りていった。
ハッピーバレンタイン、と残して。

○●○●

「俺達との戦いは、何かのゲームって訳じゃないのにな…ふざけてんのかな、あいつ」
「彼女の考えは分からない。気まぐれだし、他人の私達が分かれる筈もない」
主南家に降り立った初は、赤い羽根を散らして変身を解除する。
同時、賢樹の背の翼も橙の羽根を散らしていく。
「ふーん、なんだかんだで長い付き合いだしな、お前ら」
「…それより」
縁側に腰を下ろす二人。
先程より距離は近い。
それにほんの少し驚く賢樹に、初は微笑む。

「…鳥居くんのお陰ね。三年間こうして頑張って来たけど、あんなに追い詰められたのは今日が初めて」

「そうなのか？それは…どーも」

初の笑顔に、自身の顔が少し熱くなるのを彼は自覚する。
更に初は、そんな彼に追い打ちをかけた。

「…お礼」

顔を背けていた賢樹が、え、と振り向いたのは初にとっては大きな誤算だった。
頬にする筈のキスは、唇へ。
二人は固まった。

「「……」」

同時、離した口は互いに謝罪の言葉を生む。

「ごめんなさい、そんなつもりじゃ…」

「悪い、俺も急に振り向いて…」

盗み見する為の視線は合わさり。
それがおかしくて、二人はそのまま笑った。

「ふふっ、おかしい」

「まったくだ、ははは っ」

一頻り笑った後、二人は再度目を合わす。
「…お礼とかは、俺がするべきなんだからな。…お前に会えて良かったのは、俺の方なんだ」
「私もよ。初めは何か嫌だったけど」
「嫌だって何だよ」
「だって、ふふ、ごめんなさい」
賢樹の手が伸びる。初の頬へと。
「初。…これからも、頑張ろうな」
「うん。…賢樹くん」
近付く二人の顔。
そして、距離はゼロへ。
事故でもなく、同意のある、初めてのちゃんとした、キス。
昼下がりの陽光が、二人を見守っていた。
○ ● ○ ●
「嘘でしょ…このあたしがボロ負けだなんて…」
「みちる。それが真実。受け入れな」
「嫌よ！！」

要片家。玄の部屋。
黒いガラスのローテーブルを強く叩き、みちるは悔しさを滲ませていた。
「…今日は最悪よ。バレンタインなのに、あなたは甘いもの嫌いだし」
「好きだよー？チョコレートが嫌いなだけ」
対し、玄は笑う。内心で舌を出しながら。
（…バレンタイン、限定でね）
みちるは机の前から動き、玄の寝転がるベッドに顎を乗せる。
先程見せていた敗北の苦さは、既に無い。
「ねえ玄。じゃあ強くなる為に…」
「ごめん、却下。そんな気分じゃない」
「〜〜…」
むくれるみちるに彼は言う。
「仕方ないな。それじゃ次ヤバくなったら手伝うから」
「本当！？やっと見れるのね！？」
「ああ。だから次は絶対勝てる」

やった、と跳ね上がるみちるを尻目に、玄は黒い石に呼びかけた。

（僕達の力を見せてやろうよ。次は暴れるよ…サヨ）

『玖』は彼の気持ちを受け取ったかのように、妖しく輝いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2490h/

Feathers of four pieces

2011年11月20日19時32分発行